
COBALT-SERIES
禁断の影金の暁闇8
うこんのぎょうあん
破妖の剣6
前田珠子
集英社



COBALT-SERIES

破妖の剣　6

鬱金の暁闇 8

前田珠子

集英社

破妖の剣


破妖の剣



COBALT-SERIES

破妖の剣 6

鬱金の暁闇 8

前田珠子

集英社

目次

鬱金の暁闇 8

第二十六章　一瞬の交錯……13
第二十七章　光の騙し絵……59
第二十八章　成就を待つ者……107
第二十九章　ヒトガタの城……151
あとがき……196

破妖の剣　鬱金の暁闇

これまでのあらすじ

創造神ガンダルの生み出した世界、ガンダル・アルス。人々は複数の命と強大な力を持つ魔性たちに脅かされていた。彼らに対抗できる力を持つ人間たち――封魔の力を持つ捕縛師、滅魔の剣に選ばれた破妖剣士、魔性を味方に引き入れる力を持つ魅縛師――が「浮城」に集い、魔性との戦いに尽力していた。

ラエスリールは、金の妖主を父に、かつて城長だった魅縛師を母に持つ少女。浮城屈指の破妖刀「紅蓮姫」に選ばれた彼女は破妖剣士として著しい活躍をするが、闇主という謎の魔性に愛され翻弄され、魔性として生きることを選んだ弟・乱華には歪んだ執着心で追いかけられ、彼女はなにかと切れぬ絆や因縁がつきまとうのだった。

翡翠の妖主の守護者の罠によって浮城を追放されたラエスリールは、数々の死闘を繰り広げ、この世に五人しかいない妖主の一人、翡翠の妖主を滅ぼす。父の配下の魔性に命を狙われ、浮城で編成された紅蓮姫奪還チームに追われ、行き場のなくなったラエスリールは闇主とともに逃亡していた。しかし突然現れた父によって喉元に手をかけられ仮死状態になってしまう。その肉体は浮城最奥に紅蓮姫の「鞘」として収められる。紅蓮姫の第二の使い手として選ばれたのは、紅蓮姫奪還チームの一人であるアーゼンターラ。そんななか誕生した第六の妖主（雛の君）が次々に妖主たちを配下に従え、ある目論見を実現させようとしていた。一方で、死んだはずのラスの母チェリクは、ラスを永い眠りから目覚めさせ、自らの体内に取り込んでいた――！　そしてアーゼンターラは、紫紺の妖主との決戦に乗り込もうとしていたのだが――。

妖主たち

金 **王蜜の妖主**
ラスの父。最愛の妻を亡くして以来、姿を消す。

赤 **柘榴の妖主**
クセ者ぞろいの妖主たちの中でもかなりの強者。

緑 **翡翠の妖主**
夢に通じる力を持つ。ラスによって滅ぼされる。

白 **白焔の妖主（白煉）**
熱に通じる力を持つ。一時期人間だった。

紫 **紫紺の妖主（藍絲）**
糸に通じる力を持つ。白煉に執着している。

夫婦?

第六の妖主（雛の君）
緑の妖主の死により現れた新しい妖主なのだが…。

娘

息子

ラエスリール（ラス）
破妖刀「紅蓮姫」の使い手。半人半妖で魅了眼を持つ。不器用な性格。

アーゼンターラ（ターラ）
現在「紅蓮姫」の使い手だが、悩みも深い。

リメラトーン（トーン）
妖貴の大火で生き別れになっていたターラの弟。

双子

オルグァン
破妖剣士。「氷結斬」と呼ばれる破妖の斧を使う。

スラヴィエーラ
破妖刀「夢晶結」を操る、破妖剣士の少女。

マイダード
捕縛師。自らの刺青に魔性の命を封じ込める。

懐いている

邪羅（ザハト）
妖王夫婦の息子で、ラスを姉のように慕う。

紅蓮姫奪還チーム

破妖の剣 人物相関図

親友

チェリク(リーク)
浮城の元城長で、伝説的魅縛師(みばくし)だが妖主と結婚。

夫婦

息子



マンスラム
浮城の前城長。ラスを養女として育てた。



濫花(らんか)(リー)
ラスが拾った半人半妖の少年。乱華に酷似。

懐いている



乱華(らんか)(リーダイル)
ラスの弟。魔性として生きる超弩級のシスコン。

アーヴィヌス
現在の城長。かつては捕縛師(ばくし)として活躍した。



闇主(あんしゅ)(千禍(せんか))
ラスの護り手。壮絶な美しさと極悪非道な性格は魔性のなかでも群を抜く。

護り手



セスラン
捕縛師(ばくし)。人あたりはいいが、実は食わせ者!?



彩糸(さいし)
リーヴシェランを溺愛する美しく聡明な護り手。



サティン
面倒見のよい捕縛師(ばくし)。ラスの姉のような存在。

護り手



リーヴシェラン
琴の音を用いる魅縛師(みばくし)で、気の強い美少女。

いいがんじて

浮城における ラスの理解者たち

イラスト／小島　榊

第二十六章　一瞬の交錯

1

その気配に気づいたのは、ラエスリールよりチェリクのほうが早かった。
まだ早い――。
気配の主に、まだラエスリールが完全にではなくとも目覚めていることを知られるわけにはいかない。
そう判断したチェリクは、ほとんど強引に意識を浮上させ、娘のそれと入れ替わった。
彼らが――ひとつの肉体にふたつの意識を宿す姉弟が現れたのはその直後だった。
どうにか間に合ったという安堵を表には出さず、チェリクは驚きを装い目を瞠った。
現れたのは、眠る娘とよく似た娘だ。
色違いの瞳の色彩を除けば瓜二つと言って良い。それもそのはず、その娘はラエスリールの左目に宿っていたもうひとつの命を核に、翡翠の妖主によって生み出された守護者なのだから。
だが、表出している意識は彼女のものではない。

本来の肉体から切り離されたチェリクの息子――リーダイルのものだ。
「なぜです」
予想もしていなかった人物の出現に、激しい驚きを示した青年は、しかしすぐに疑問と……そうしてずっと抱き続けていたのだろう深く大きな怒りをぶつけてきた。
あなたが死んだせいで、ラエスリールがどんな思いを味わったと思ってるんですか！
叩きつける言葉には、別の声が重なって聞こえる。
あなたが死ななければわたしは姉上と離れることはなかったのに！
昔から、リーダイルの執着は姉であるラエスリールひとりに向けられていた。両親と姉を秤にかければ、「ラスは弱いから」と理由をつけて、迷わず彼女を選ぶほどに。
その姉と離れるきっかけとなったチェリクの死を、彼はずっと憎んでいたのだろう。だが死者である母にその思いをぶつける術はなく、それゆえに胸の奥に抱え込んでいたに違いない。
その自分が突然現れたのだ、抑えつけていた反動は大きく、彼自身制御できない激情を爆発させたのだ。
器用そうに見せかけながら、夫や娘同様、実は不器用な子供であることを、チェリクは知っていた。
ラエスリールを守るための力を得るために、必死に父に従い、力を増そうと努力していた。

彼女の前では屈託なく笑うその顔を、父やその配下の妖貴の前では封じているのだろうことは容易く見て取れた。

だが、同時に彼が大変な矜持の持ち主であることも知っていた。

血を吐くような努力の果てに得た力も、何でもないことのように振る舞い、そのことを見抜かれまいと必死に隠していた。下手に指摘すれば、その相手の一部を吹き飛ばしかねない激しさもまた、母であるチェリクには見えていた。

だから、そこには触れぬよう気をつけていたのだ。

別にリーダイルの怒りを恐れたわけではない。我が子の力に怯えるような神経は、彼女にはなかった。たとえ魅了眼の力が失われて久しく、力を向けられればただではすまないことがわかっていても、それでも彼女は子供たちの力を恐れたことはない。

そんな普通の神経を持ち合わせていたら、そもそも彼らの父親と契りを結んだりはしなかった。

自分を支配し破滅させようとした妖主と、それに抗い支配の鎖を霧散させようとした自分――魅了眼同士の力のぶつかり合いの中で、精神崩壊一歩手前まで追い詰めてくれた相手への恋情を認めた時は、自分でも己が神経が信じられなかったほどなのだから。

とはいえ、そのあたりのことを気遣うあまり、リーダイルと深く語り合う時間を充分に取れ

なかったことは後悔している。多少の怪我は覚悟の上で、彼の鬱屈を少しでも晴らしてやれば、ここまで溜め込むようにはならなかったかもしれないのだ。

だが、それは今さら言っても詮ないことだ。

当時の事情を説明すれば、彼の怒りも少しはおさまるかもしれないが、今は思う存分爆発させてやったほうが良い。不器用な息子のこの怒りが、母である自分への甘えの裏返しであることは見て取れるのだから。

そんなことを思いながら、リーダイルの罵声を受け止めていたチェリクだが、同時に気になることがあった。

目の前の娘から放たれる異質な気配に気づいたのだ。

ラエスリールの守護者として生み出された緋陵姫が、一度命を落としたことは知っている。翡翠の妖主の死後、新たに生まれた第六の妖主によって、冥の海から連れ戻されたということもだ——その結果、彼女の肉体と魂には、第六の妖主の支配の楔が打ち込まれているのが視える。

ラエスリールとリーダイルを守ることを第一にして絶対の務めとして生まれた存在でありながら、第六の妖主に命を握られ、絶対的支配を強いられているのだ。

この矛盾が緋陵姫を苦しめていないわけがない。

もしかして、この奇妙な気配は、その顕れなのだろうか――？

もっとよく視ようにも、リーダイルの意識が表出している今の状態では限界があった。

さらに言うなら、緋陵姫の意識は随分と深い場所に身を置いているようだ――まるで隠れているかのように。

いや、もしかしたら、本当に隠れているのか。

隠れなければならないような理由があるというのか。

だとしたら、それを見極める必要がある、とチェリクは感じた。

緋陵姫から放たれる異質なそれは、到底看過できない、してはならないと感じさせるものがあるのだ。

だから、リーダイルがこちらの思惑通り、先ほどの魅了眼の力の発現を、ラエスリールではなく自分のものだと思い至ったところで声をかけた――そう思わせるために、強引に意識を交代したのだから、最初の目的は達したといえる――のだ。

「リーダイル」

言いたいことをある程度ぶつけて落ち着いたのか、あるいは自らが導き出した結論に衝撃を受けたのか――リーダイルの反応は鈍かった。

のろのろと顔を上げる息子の奥の、もうひとりの娘をよりよく視るために、チェリクはこう

告げた。

「奥にいるのは……緋陵姫ね？　ラスと一緒に生まれてきたもうひとつの命……わたしのもうひとりの娘……」

魔性にとって名前の持つ意味と重さは、人間にとってのそれとは比較にならない。

そのことを知り尽くす魅了眼の持ち主は、リーダイルの奥で、びくりと震える娘の姿をはっきりと視た。

その顔に浮かぶ怯えの色、肉体ではなく魂から漂う異質ななにか――それを視て取った瞬間、チェリクは確信した。

あの娘は己（おのれ）に生じた異変に気づいている。そして、そのことを他者に知られることを恐れているのだ！

なんということ。

声には出さず、チェリクは呟（つぶや）いた。

リーダイルは気づいていないのだろうか？　同じ肉体に宿っている息子はあの、もうひとりの姉を蝕（むしば）む恐ろしいモノの存在に？

自問の答えはすぐに出た。

知らないのだ。知るはずがない――もしも彼が知っているなら、緋陵姫があれほどに怯えた

目をするはずがない。

彼女は、自分を通してそのことをリーダイルに知られることを恐れているのだ。

何とかしなくては。

チェリクは唇を噛みしめ、思った。

あんな状態の緋陵姫を、このまま放っておくことなどできない。アレは彼女に消滅より惨い未来をもたらすものだ。

そんなものを見過ごすわけにはいかない。

だが、彼女が考えを固めるより、真実を見抜かれたことを悟った緋陵姫の行動のほうが早かった。

先ほどチェリクがラエスリールの意識と交代したのと同じほどの強引さで、肉体の支配権を奪い取るなり、空へと逃げ出したのである！

しまった。

いかにチェリクでも、空を飛ぶことはできない。

だが、今追いかけなければ取り返しのつかないことになる。

チェリクは隠形を命じたふたりの妖貴を呼んだ。

「空也！　あの子たちを追いかけて！　絶対に見失っては駄目よ！　宋流はわたしを運んでち

ようだい！　速度優先で、体の負担は考えなくていいから！」
叫び終えるのを待たず、チェリクの体が宙に浮いた。
空也の姿はすでに遠い――これなら追いつけそうだ、と息をついたときのことだ。
背後で宋流が苦笑する気配がした。
「なに？」
尋ねたチェリクに、黒髪の妖貴は自らを笑うような声でこう答えた。
「我が君に匹敵する力をお持ちのお方さまが、まさか移動に我らの力を必要となさるとは正直思っておりませんでしたので……」
意外に感じたのですよ。
この答えに呆れたのはチェリクだ。
「何を馬鹿なことを。確かにわたしは鬼子だなんだとさんざん言われましたけどね、正真正銘人間なのよ。翼もないのに空を飛んだりできるわけないでしょう」
「ですから、そのことを綺麗に忘れていた自分に驚いているのです」
嘘とは思えない口調だったが、チェリクは反応に困った。
これは褒められていると考えていいのかしら？
だが、それより先に考えなければならないことがあった。

「どうでもいいけれど、いい加減空也を追いかけてはくれないかしら？　もう姿が豆粒のようにしか見えないじゃないの」

決して見失うなと空也には言っておいて、その彼を見失ったのでは話にならない。

しかし、宋流は涼しい顔をして答えた。

「ご心配なく。あれが追いついた時点で、そこに跳躍すればいいだけのことです。わざわざ空を飛ぶ必要はありません」

この言葉に、チェリクは少しだけ空也に悪いことをした気になった。

「……もしかして、宋流は無精なのかしら？」

「気遣いに長けていると言っていただきたいですね。あと、用心深いとでも。わたしはよほど切実な事情でもない限り、火中の栗を拾うつもりはないのです。お方さまを抱きかかえて空を移動するなど……恐ろしい真似は極力避けたいに決まっているではありませんか」

その声が、意外にも真剣なものだったので、チェリクは思わず首を傾げた。

「意味がわからないわ」

聞こえよがしな大きなため息が、宋流の口から洩れたのは次の瞬間だった。

「……どういう意味のため息かしら？」

馬鹿にされて良い気持ちがする者はいない。

声が尖るのは致し方ないことだろう。
それに対して、宋流は変わらず涼しい顔で答えたのだ。
「ご自分が、執着することを知らぬ我が君が唯一欲された女性だという自覚はおありですか？」
異論はあったが、彼の言わんとするところは理解できる。
こういうことで嫉妬するようなひとではないと思うのだけれど――。
浮かんだ言葉は口にはしなかった。
彼らが自分の夫のことを、どんな風に捉えているのか、非常に興味深くはあるが、それは後でゆっくりと聞き出せばいいのだ。
今、優先すべきことは他にある。
気づかれないよう、小さく息をついて、チェリクは黙してその時を待った。
何も知らぬリーダイルにとっては残酷な結末となるかもしれないが……その結果自分は恨まれることになるかもしれないが、それでも緋陵姫をあのままにしておくわけにはいかない。
一度死した娘が、今度は死より悲惨な運命を辿るのを、止められるのは自分しかいないのだから――。

※

逃げる青年――濫花の背中を認めた瞬間、乱華は力の礫をその背に放っていた。

緋陵姫に負担を強いる行為であることはわかっているが、急がなければならないのだ。いつまた邪魔が入らないとも限らない状況で、自由にできる肉体を得ることは何より優先すべきことだった。

背中に力をぶつけられた青年の体は、一瞬宙に浮き、次の刹那前のめりに地面に倒れ込む。乱華はその背に乗り上げると、そのうなじに左手を当てた。

宿る青年の意識を引っ張り出している余裕はない――今この時も、自分を追う妖貴の気配は近づきつつあるのだ。

幸い、地面に叩きつけられた衝撃のせいか、青年は意識を失っているようだ。

これなら、強引に自分の意識をこの肉体に移すことができる。

『乱華』

気遣うように声をかけてくる緋陵姫の声。

そこには隠しようのない恐怖と苦痛が宿っていた。

何がここまで彼女を怯えさせるのか、乱華にはわからない。だが、彼女がチェリクを見て恐

慌状態に陥るほどの衝撃を受けたというのなら、永遠にでも彼女を母から隠し通して見せる。
そのためにも、彼女を守るための力を揮える肉体が必要なのだ。
『大丈夫です、姉上』
たとえこの器が、雛の君の支配下にあるものであろうとも、そのために彼女の枷を受けることになろうとも、緋陵姫を守る力の代償というのなら安いものだ。
かつて——最愛の姉は母の突然の死により、あっけなく自分の世界から消えた。
戻ってきた母のせいで、この姉が苦しむというのなら、そんなものを母とは認めない。自分から大切な存在を奪う敵でしかない。
戦うことに躊躇いはない。
その、ためにも——この肉体はどうしても必要だ。
ぐっと左手に力をこめ、乱華は自らの意識を青年の肉体に滑りこませた。
空ではない肉体は、素直に彼を受け入れようとはしなかったが、思ったより抵抗は少ない。
雛の君が乱華のために用意した器だからかもしれない。
するすると、彼の意識は肉体との絆を結んでいく。
全身を支配するに充分な絆を結んだ時点で、乱華は未だ宿ったままの濫花の魂への攻撃を開始した。

ただこの肉体に宿ることしか知らない子供の魂は、濫花の攻撃に無様なほど無力だった。

『いやだぁぁっ！』

怯えた顔で逃げ惑う姿は、なまじ幼いころの自分と似通っているだけに、乱華にとっては許し難い醜悪なものに映った。

『なんだよ、なんなんだよ、あんた！』

なぜ、こんな酷いことをするのかと、涙と鼻水に塗れた顔で問うてくるのに、乱華は冷笑でもって答えた。

『わたしのために用意されたものを、わたしが取り返すことのどこにおかしなところがあるというのだ？』

言外に、これは自分のものなのだと告げれば、子供が『違う！』と叫び返してきた。

『あんたのものじゃない！　これはおれの体だ！　おれの体なんだ！』

それは生まれてよりずっと、不要な意識として扱われてきた子供の必死の叫びだった。

だが、今の乱華にそんなものは関係なかった。

『ならば、お前はもう用済みだということだ』

その言葉に、子供の顔が苦しげに歪んだが、乱華は残酷なことを告げたとは思わなかった。

彼にとって、それは厳然たる事実だったのだ。

自分がこの器を必要としている以上、子供の意識は無用どころか邪魔でしかない。
『消えてしまえ』
言うなり、乱華は右手に溜めた力を放った。
肉体には無害の、だが意識や気を無に帰す力だ。
子供が恐怖に目を瞠り、悲鳴を上げた。
『うわあぁぁっっ！』
……それが、子供が残した最後のものだった。
かつて濫花と呼ばれた子供の肉体は、この瞬間、完全に乱華のものとなったのである。

2

虚空に浮かぶ真球の空間――あらゆる外界からの干渉を受けつけないそこは、六番目に生まれた妖主のために用意された居城だった。

その一室で、未だ名もなき妖主である少女は、漆黒鏡を覗きこむのにそろそろ飽いていた。

彼女が求める鍵たる娘とその仲間たちは、これから対峙する敵の配下を相手に苦戦を続けており、見ていて楽しいものではなかったのだ。

あふ、とあくびをかみ殺しながら、雛の君と呼ばれる少女はついに立ち上がった。

面白くもない番組を見せられるほど退屈なことはない。

これ以上は見ているほうが苦痛だ。

いくら必要な段取りとはいえ、それに自分がつきあわなければならない義理はない。

彼女はそのまま部屋をあとにした。

お気に入りの娘――とはいっても、自分より年長なのだが――を呼ぼうとして、その気配が

城内にないことに気づく。

この空間において、彼女が知り得ぬことなど何もない。

気に入りの娘の不在は確かめるまでもない現実なのだと悟らざるを得ない——そのことが、雛の君を不機嫌にした。

確かに緋陵姫には好きにしていいと許しを与えている。だが、少し前までは、少女が望むとき、彼女がそばにいないことなどなかった。

いつだとて、少女が望めば、どこからともなく彼女は現れた。

『どうなさいましたか？』

『ご機嫌が麗しくないご様子、何か楽しい話でもいたしましょうか』

『気鬱の虫に取り憑かれておいでのようですね。こういう時には気晴らしに遊ぶのが一番と申しますよ』

少女のその時々の心境を正確に読み取り、彼女はいつも先回りをして気遣ってくれた。

その当たり前のことが当たり前でなくなったのは、彼女の中にもうひとつの意識が宿ってからのことだ。

乱華——王蜜の妖主と人間の女の間に生まれた青年は、緋陵姫にとって弟にも等しい存在だった。

正確にいうなら、彼女と命を分けた主人の、血を分けた弟だ。
その絆は雛の君が苛立つほどに強く、だから本当はあの青年の意識を緋陵姫の中に宿したくなどなかった。
それでもそれを願う緋陵姫の言葉をはね除け、彼女に嫌われることを恐れた結果が今のこの状況だ。
いくら彼女の頼みでも、聞き入れるべきではなかった。
今にしてそう思っても、やり直しはきかない。
時を操る配下の妖主に命じれば、不可能ではないかもしれない。だが、時を遡っての選択の変更が、現在の状況にどんな変化をもたらすか読み取れぬ以上、下手は打てないのだ。
「苛立たしいこと。何もかもが苛立たしい……！」
自室を出たところで、そんな本音を洩らしたのは、緋陵姫の不在に苛立つあまり、犯してしまった失態だった。
それでも、誰も聞いていないと思っていた場所から、思いがけぬ声が聞こえてくるまで、それが大きなものとは認識していなかったのは不覚としか言いようがない。
「気持ちはわからないでもないが、緋色の小鳥が大事なら、ここに呼び出すような無茶は控えることを勧めるぞ」

何の気配もなかったはずの場所に、深紅の青年が腕組みをして佇んでいた。
油断ではない——明らかに青年は雛の君に気づかれぬよう、時を駆使して気配を絶っていたのである。
彼の態度に不快を覚えたことを伝えるべく、じろりとねめつけたが、青年は飄々とした態度を崩さない。
それでいて、丁寧に答えてくるあたりが厭味に感じるのは自分の穿ちすぎだろうか？
否。
くつりと喉を鳴らした青年が答える様子を目にした瞬間、そうではないと少女は確信した。
「あなたの緋色の小鳥が、困ったことになっているのに気づいたもので、ちょっとご注進に来たところなんだがね。だが、誰より深くあの小鳥と繋がっているはずのあなたが、何も感じていないというのなら、これは気の回しすぎだったかな……」
白々しいの一言に尽きる。
この段になって、雛の君は青年の自分に対する「あなた」という呼びかけが、敬意の発露どころか慇懃無礼の効果的な道具とされていることに気づかざるを得なかった。
しばらく前に、初めて「あなた」と呼びかけられ、そのくせ言葉遣いがぞんざいだった時、少女は「お前と呼ばれないだけましだと思うべきかしら？」と問うたことがある。

男は「おれは誰に対してもこうだ」と答えた。敬語を求めるなら別の誰かを選ぶべきだとも——その時は気づけなかったことが、今はっきりとわかる。

男はそもそも誰に対しても敬意など覚えていないのだ。

だから、たとえ位が上の王蜜の妖主に対してすら、敬語を用いようとしない。

そんな男が、わざわざ自分だけを「あなた」と呼ぶ。

そこに男が好意的な何かを自分に対して抱いているからだ——などと思えるほどに少女は単純にも楽天的にもできてはいなかった。

逆転の構図だ。

男は自分のことを対等でない相手だと思うからこそ、わざわざ「あなた」などと呼ぶのだ。

その大いなる侮辱に、今の今まで気づくことができなかった自分への歯がゆさ、情けなさ。

けれど、その怒りを叩きつけたところで、男は「わからなかったのか？」とでもあっさり答えるに違いないのだ。

憤ろしい。憎らしい。殺してやりたいほどだ。

だが、この男の巧妙なところは、相手に燃えるほどの殺意を抱かせながら、そうと走らせない材料を手前に蒔くあたりだ。

あなたの緋色の小鳥。

その意味するところは明らかだ。
「……緋陵姫が、どうしたの？」
敗北感を噛みしめながら尋ねた少女に、しかし男は明確な答えを与える親切心すら示すことはなかった。
「いや？　よくはわからないんだが、妙な空気を感じるんでな。ちょっと覗きに出かけようかと……せっかくだから、あれを気に入ってるらしいあなたも誘ってみるかなと、単純にそれだけの話なんだがね」
この時点で、少女は悟った。
男の言葉に嘘はなくとも、真実と呼べるものもまたないのだ、と。
何という男――！
自分に容易く膝を屈した男の得体の知れなさに一抹の不安を覚えながら、それでも漆黒の少女は彼の誘いをはね除けることはできなかった。
彼女の、緋色の小鳥。
かけがえのないただひとりの女性。
緋陵姫の安否がかかっているというのなら、それがどれほど危険な誘いであろうと、少女は乗らずにおれぬのだ。

※

よりにもよって、ここだなんて――！

空也の合図に応え、宋流とともにその地に跳躍したチェリクは一目見た瞬間に、そう叫びそうになった。

それは何という運命の皮肉だろう。

二度と相まみえることはないと思った親友とかつての護り手が住むその場所を、空也はリーダイルと緋陵姫が逃げ込んだそこだと伝えてきたのだ。

宋流に連れられ、跳躍してみれば、空也はその場の上空にただひとりで漂っている。

「あのふたりは？」

と尋ねたチェリクに、空也は困ったような顔で、「あのあたり」と上空から決して狭くはない範囲を指で描いて示す体たらくだ。

この役立たず！

と、チェリクが空也を罵らなかったのは、空也が手出しを躊躇った理由がはっきりと見て取れたからだ。

浮城の結界の端にかかるその小さな家の周囲には、複雑過ぎる力が別々に織りなされているのだ。

前の城長とその身を守る護り手による守護陣は、まあ妖貴である空也には無意味と言っても差し支えない。

だが、その前城長が作った親友――つまり、チェリクだ――の墓（元）には、意識が宿らぬ状態のチェリクの肉体の波長が写しこまれていたし、それをわざわざ掘り出した王蜜の妖主の力の波動、さらには柘榴の妖主のそれまでもが刻み込まれていた。

それだけで、空也が手出し不可能と判断したのも無理からぬことだというのに、さらにそこに両者の息子である乱華が乱入し、力を揮ったというのでは、下手に介入するのは命取りというものだ。

幾種もの力が入り乱れ、乱反射しまくっているといっても過言ではない状況がそこにはあったのだ。

こんな恐ろしい状況で、手出しできるのはよほどの手練れか、自分はもちろん他者の命も顧みない考えなししかいない。

空也がそうでなかったことは、チェリクにとっても幸いだった。

だが――。

じわじわと、イヤな予感が体に染みこんできたのも確かな事実だった。
もはや手遅れだと。
すでに打つ手のひとつは失われたのだと。
胸にせまる空気は重く、だがそれを容易く受け入れることは彼女にはできなかったから——だから。
彼女は空也に問うたのだ。
「あの子たちはどこへ行ったの？」
と。
その時だ。
『うわあぁぁっ！』
人間の耳には不可聴な、子供の悲鳴が響き渡った！
ひとつの気配が、眼下の空間から消えてなくなったのを感じた瞬間、チェリクは決断した——なにが起こったのか、この目で確かめなければと思ったのだ。
「行くわ」
「お方さま、ですが……」
渋る宋流に、「降ろしてくれないなら飛び降りるわ」と言い放つと、ようやく彼らはチェリ

クとともに眼下の木立に降下した。
だが、そこで目にしたものは――。
「姉上、下がっていてください」
背後に蒼白な緋陵姫を庇いながら、こちらに敵意を向けてくる金髪の青年の姿だった。
記憶にある息子の姿に酷似した、だがほんの髪一筋ほどの違和感を漂わせるその青年の肉体には、緋陵姫のそれにもある、漆黒の羽にも似た不可視の刻印が視えた。
それは第六の妖主の支配の徴――。
「なんということを……」
チェリクの呟きは掠れ、萎んで宙に消える。
愕然と、ただ愕然として、彼女は恐ろしい存在の手を取った、ふたりの子供たちを見つめることしかできなかった。

※

やはり来たか。
ふたりの妖貴を従え、目の前に降下してくる母を見つめながら、乱華は苛立ちを覚えた。

連れのふたりは知らぬ顔だが、ここ数年の間に生まれたものではない。同じ妖貴でも、長い年月で培った経験を窺わせる凄みのようなものは、生まれて間もない魔性には持ち得ないものだ。

母が魅了眼を用いて従えたのだろう。

彼女の実力は父も認めるものだと認識はしていたが、実際にその威力を目にしたことはない。それゆえ、彼女を甘く見ていた部分はある。

だが――。

目の前の妖貴を――それも二人も魅了したというのなら、恐ろしい力の持ち主であることは間違いない。

そう、ふたり……問題なのはそこだった。

ひとりなら、相手取っても負けない自信はある。この器に宿ったばかりで力の加減に多少手間取るかもしれないが、充分に勝機は見いだせるはずだ。

いや、ふたりが相手でも、緋陵姫の調子が万全なら何も問題はない。経験豊かな相手は厄介だが、それでも緋陵姫と自分なら何とでもできる。

だが、緋陵姫はいま、本調子とは言い難い。今にも倒れそうな顔色の彼女を、戦いに巻き込むなど論外だ。

だとしたら——選べる策はひとつだけだと乱華は結論づけた。
逃げるのだ。
但し、ただ逃げるのではない。また追いかけられて同じことを繰り返すのは御免だ。
決して相手が追って来ない……来れないほどの痛手を負わせた上で撤退する。それしか方法はない。
本音を言えば、敵に背中を見せるなど我慢ならない。自らの矜持を守るためなら、どれほど傷つこうとも相手を打ち倒し、足下にひれ伏せさせることを選ぶ。それが王蜜の妖主の息子として生まれた乱華の意地だ。
だが、今は矜持以上に大切なものがかかっている。
自分が意地に拘って、ふたり目の姉を危険に晒すわけにはいかない。かつてのラエスリールのように無力ではないが、弱っている緋陵姫は、自分にとっては守るべき弱者だ。
守り抜くことこそが、誇りに繋がる。
そのためであれば——。
撤退を恥と感じる心などねじ伏せて構わない。
乱華は冷静に、逃げるための算段を組み始めた。妖貴ふたりに痛手を与えるのは不可能ではないが時間がかかるだろう。それは好ましくない。

やはり、ここで狙うべき標的は――。

「母上、先ほども言いましたが、今さらあなたに出る幕はありません」

思っていた以上に、冷ややかな声が出た。

自分にとって母はすでに死者であり、本当に今さらの存在なのだ。

だから、そのひとを傷つけることさえ、躊躇いはない。

「身の程も知らず、しゃしゃり出るおつもりなら、ここで引導を渡して差し上げる！」

そう叫びながら、乱華は力を放った――最も警戒すべき彼女の双眸を狙って！

「リーダイル！」

自らに向かって揮われる力に、チェリクが目を瞠った。

だが、乱華の狙いは外れた――否、外されたのだ。

ふたりの妖貴がチェリクを庇ったからではない。彼女の輝きを増した瞳が光と力を従え、彼の放った不可視の刃を搦め捕ったのだ。

「非常識な……」

思わず洩れた呟きは、以前もうひとりの姉に感じたものと同じだった。

だが、ここで退くわけにはいかない――一度目の攻撃が無効化されたせいで、狙いが奈辺にあるかは恐らく知られてしまったろう。

だったら、今度は直接斬りつけるまでだ。
乱華は力を纏い、それとは別に実体を持つ剣を取り出した。
滅多に使うことはないが、使えないわけではない。力に頼り切ることのないよう、修練を積まされたのだ。
妖気や魔力がチェリクの魅了眼の前では無力化しようとも、実体をもつ剣はそうはいかないはずだ。後は、彼女の眼差しに捕まらないよう気をつければ……。
「リーダイル！　それ以上力を揮っては駄目よ！　あなたの意識をその体に馴染ませてはいけない！」
チェリクが必死に訴えるが、乱華にとっては無意味な繰り言にしか聞こえない。
「余計なお世話というものです。何を今さら親切ごかしに……母親面されても迷惑なだけです！」
叫びながら、乱華は地を蹴った。
チェリクを庇おうと動くふたりにまず力をぶつけ、相手の動きが止まった隙を縫って狙う相手に肉迫する。
「リーダイル！」
「その名で呼ぶなと言ったはずだ！」

怒りをこめ、乱華は剣をその双眸目がけ――。
横に払おうとした、まさにその刹那。
「はい、そこまで」
冷笑を孕んだ男の声が割り込んできた。
否、声だけではない。目に見えぬ力が、一瞬にして乱華の体を元の位置へと引き戻したのである。
「邪魔立てを！」
怒りのまま、振り返り、相手を怒鳴りつけようとした乱華は、しかし信じられぬ存在に声を失った。
今にも倒れそうな緋陵姫の体を支えるように、漆黒の闇の化身がそこにいたのだ。
そして、彼を止めた声の主――時間を操る深紅の闇のそれは、何の感慨もなさそうにこちらを一瞥した後、口の端をつり上げ楽しげに告げた。
「双方、おいたはそこまでだ」

3

そこまでだ――。
深紅の魔王の声がそう告げた瞬間、緋陵姫が覚えたのは安堵の念――それだけだった。
間に合った。
何に対する安堵かも把握できぬまま、息をついた彼女は、自身の体が力を失い、ぐらりとかしぐのを感じた。
それを支える手の感触に、はっとする。
まさか。
それは、声の主のものではなかった。それでいて、よく知るひとのものだった。
だが、それは現時点ではここで感じられるはずのないものだったのだ。
まさか。
そんなはずはない。

彼女の心を嘲笑うかのように、冷酷な現実は、あり得ない声をその耳に届けた。

「駄目よ。じっとしてなさい」

それは第六の世界の主――雛の君と呼ばれる少女のものだった。

虚空の彼方で守られた居城に、今もいなければならないはずの新たな世界の女王が、なぜかいま緋陵姫を支えてここに在った。

愕然とした。

それはあってはならないことのはずだ。

時が来るまで、彼女は居城で力をひたすらに蓄えなければならないはずだった。

卵が、孵化を迎えるために力を溜めるように――。

その彼女が、なぜ、ここにいるのか。

「ど……して……」

問いかける声は掠れていた。

漆黒の魔女王は、整いすぎた顔に憂いの影を漂わせ、「休んでなさい」と耳元で囁いた。

絶対の主からの命令だったが、緋陵姫は素直に従うわけにはいかなかった。

気がかりなことがいくつもある。

自分のために、新たな器を求めた弟――乱華のこと。

自分の真実の姿を知ったに違いないチェリクの言動。
とくに後者は、何を口にするかわからないという点で、緋陵姫にとって脅威以外の何物でもなかった。
一刻も早く、あの恐ろしい魅了眼の主から離れなければならない。
そう思うのに、負担を強いられた体はなかなか自分の思うとおりに動いてはくれないのだ……そう、舌先すらも。
そんな緋陵姫をよそに、事態は勝手に動こうとしていた。
「おいたとは、またふざけた仰りようですね」
敵意とまではいかないが、それに近い挑発的な言葉を、深紅の青年に返したのはチェリクに従う妖貴のひとりだった。
チェリクを守るよう、ふたりの妖貴は彼女の前に並んで立っている。
そのせいか、チェリクの顔は隠れた格好になっていたが、新たに現れたふたりの存在に大きな衝撃を受けたらしいことは、空気の乱れでわかった。
「おいたはおいただろう。こんなところでドンパチやるなんて、本気なら正気を疑うところだ」
深紅の青年の言葉に、妖貴のひとりが身を乗り出して何か言いかけるのを、もうひとりが止

めた。

だが、その妖貴の瞳にも、拭いがたい敵意が浮かんでいる——過去、何らかの因縁があったのかもしれない。

もっとも、敵を作るのが得意な柘榴の妖主のことだ、そんな相手は珍しくもないのだろう。

睨みつけられたところでまったく動じる様子もない。

それどころか、関心もあまり覚えないらしい。

彼らの相手をすることなく、あっさりとこちらを振り返った男は、気遣うように声をかけてきた。

「大丈夫か？」

違和感に一瞬ぞくりとするものを感じたが、体が重く、理由までは考えられなかった。

代わりに答えのは雛の君だった。

「大丈夫のはずがないでしょう？　この顔色を見てわからないの？」

噛みつくような口調だった。

彼女が本気で自分を案じてくれているのは疑いようがない。

だが、次にかけられた青年の声に、緋陵姫はまたしても説明しようのない違和感を覚えた。

「あなたも含めて尋ねたつもりだったんだが……城外に出るのは初めてだろう？」

雛の君を気遣う言葉を彼の口から聞くのは初めてだ。
しかも皮肉や冗談まじりというわけではない——驚くのと同時に、疑問が湧き上がってくる。
男の真意がわからない。
だが、雛の君はそうしたことには関心がないらしい。実にイヤそうに顔を顰めると、「無駄口を叩いている暇があるなら、早く話をつけてちょうだい」と返した。
「大体、乱華を止める必要があったのかしら？　わたしの大事な緋陵姫をこんなに追い詰めたのはその女なのでしょう？」
この言葉に、ふたりの妖貴がぴくりと肩を震わせた。
だが、動こうとはしない。自分たちが動いた隙にチェリクが狙われることを考えて、動けずにいるのだろう。
「おれも母子喧嘩に首を突っ込むつもりはなかったんだがな、せっかく甦ってくれた細君が傷つけられたとなれば、金の野郎が黙ってるとも思えなかったんでな。ひとつ恩を売っておくのも手ってもんだろう？」
深紅の青年の言葉が意外だったのだろう、雛の君が息を呑んだ。
「なんですって？」
「あれは金の野郎が伴侶に選んだ女で、こいつらの母親でもあると言ってる。死んだはずだが、

黄泉路を辿らず残っていたんだろうな。なんで今頃と思わないわけでもないが……」

雛の君は問いかけるような目を緋陵姫に向けてきた。

青年が告げた今の言葉が信じがたかったのか、それとも青年の言うこと全てが信じられないのか、漆黒の瞳には懐疑的な光が宿っている。

そんな彼女に、緋陵姫は小さく頷くことで答えに代えた。

「まあ」

雛の君が、驚きに目を瞠る。

次いで彼女の唇から洩れたのは、呆れたようなため息だった。

「わからないことね。それなら、あのひとにとって、緋陵姫も娘に当たるはずなのに……こんな目にあわせるだなんて、信じられないわ」

ちらりとチェリクを見やった目には責めるような光が浮かんでいる。

深紅の青年が、雛の君を宥めるようにこう告げる。

「母子の間で何か他人にはわからないすれ違いでもあったんじゃないのか？　それでも、骨肉の戦いはさすがにまずかろうよ。あなたにとっても、金の野郎が静かに激怒するのはありがたくないだろう？　何しろあいつは、滅多に怒ったりはしないが、怒った時は何をしでかすかわからない剣呑なところがあるからな」

この男に「何をしでかすかわからない」とは、王蜜の妖主も言われたくないだろう。
それとも、自分たちが知らないだけで、怒れる金の闇はそれほどに物騒なのか。
雛の君は男の言葉に何か感じるところがあったのか、少しだけ考え込んだ。
「第一の君を刺激するつもりはないわ。そういうことなら、わたしも彼女に対する蟠りは捨てましょう……けれど、これ以上母子喧嘩を続けさせるつもりもないわ。戻りましょう。緋陵姫を早く休ませてやらなければ」
それきり、ふたりの妖貴もチェリクの存在も、彼女は意識から切り離したかのようだった。
深紅の男もそれに同意する。
「そうだな。あなたもあまり長く外にいるべきじゃない」
当事者五人の意志を完全に無視する妖主たちのやりとりに、はっとしたように、妖貴のひとりが口を開いた。
「お待ちください。こちらの用はまだ済んでは――」
おりません、と続けるつもりだったのだろうが、残念ながら、彼の言葉は途中で遮られた。
ふたりの登場以来、一言も口を開かなかったチェリクの口から、激情を秘めた声が上がったためである。
「……なぜっっ！　お前が……っ？」

直後、チェリクが慌てたように口元を両手で覆った。
彼女らしくない乱暴な口調に、違和感を覚えた緋陵姫は、しかしふと目に入った深紅の青年の顔に、それどころではなくなった。
男は——獲物を捕らえた肉食獣のような気配を漂わせた男は、喜悦の色を左の深紅に揺らめかせながら、笑っていたのだ！
何を考えているのかなど知りたくもない笑みだった。
全身が震え出す——。
その、瞬間だった——チェリクが動いた。
「宋流！　空也！　この場は退くわ！」
切迫した彼女の命に、漆黒の青年ふたりは即座に反応した。
強大な力を引き寄せ、彼女ごと空間を包みこんだのだ。
単純な移動のためではない術を、彼らが行使しようとしているのは明らかだった。
それを一瞬、押しとどめたのは新たにその場に現れたふたりの人物だった。
「待って、リーク！」
「チェリク！」
前城長の女性と、いつもは彼女の内にいる妖鬼だ。

呼びかけられたチェリクが、驚いた顔で振り返る――だが、彼女はふたりの青年に術を止めさせはしなかった。

声にならぬ何かを残し、三人の姿は次の刹那、その場から消え失せた。

「追いかけやしないってのに……」

すぐそばで、楽しげに呟く深紅の青年に、先ほど感じた恐ろしい気配はない。

だが、緋陵姫は震えを止められなかった。

脳裏に刻まれた男の顔が彼女を揺さぶり、怯えさせるのだ。

狙い定めた唯一の獲物の急所を押さえ込み、そののど笛に牙を突き立てる寸前の……残酷なまでに純粋な歓喜を放つこの世に唯一の獣の顔を。

決して忘れることはできないと、彼女は思った――。

※

『ラス！　止めなさい！　そんなに激してはいけない！』

チェリクの声が、遠くから聞こえるが、ラエスリールはその声に従うことができなかった。

『ラス！　激情に呑み込まれては駄目！　せっかく隠したあなたの気配が、彼らに見つかって

しまうわ！　落ち着きなさい！』

叱咤の響きを宿す声――だが、今の彼女にはそれは意味を持たなかった。

激しい、激しすぎる感情の嵐が、ラエスリールの魂に襲いかかっていたのだ。

母によって突然、意識を体の奥に押し込められた時は、何事かとは思ったが、母への信頼が彼女を逆らわせなかった。

程なくして、その理由はわかった。

リーダイルと緋陵姫が現れた瞬間、母の意図は読めた。

あなたの存在は、あちらの誰にも気づかれるわけにはいかないの。

あちら、というのが一部の例外を除く魔性であることはわかっていた。

自分の今の在り方が、父が望むことでないことは、母から聞いており、その父に繋がる存在には、だから決して明かしてはならないのだ、と。

本来であれば一番知られてはならない宋流と空也のふたりは、なぜか自分たちに全面的な協力を誓ってくれているが、それ以外の父の配下や知己に知られるわけにはいかないと――何度も何度も繰り返し聞かされた。

だから、それはリーダイルたちに対しても同じことなのだ。

だが、その姿に驚かされたのは確かだ。

一度死んだはずの緋陵姫は、瞳の色が変わっていたし、なぜ弟の意識が彼女の体に同居しているのか、他にも謎は多い。

可能ならば事情を聞き出したかったが、母の判断を信じるならば、今は沈黙を守るべきだと全てを母に任せた。

それからの彼らの遣り取りには、申し訳ない気分を掻き立てられたものだ。自分がそばから消えたことで、リーダイルがあれほどに傷ついていたのだとは、正直想像もしていなかっただけにすまないという気持ちは募った。

そして、緋陵姫――リーダイルの意識の奥に透かし視えた彼女の魂の様子に、首を傾げたのは母ばかりではなかった。

母に魅了眼の使い方を指導してもらったせいか、それとも母の目を通じて視ているせいなのか、緋陵姫の魂にひどくおかしなところがあることに、ラエスリールもまた気づいたのだ。

その正体は知れぬものの、よくないモノだということだけは感じ取れた。

あれは、このままにしておいてはいけないモノだ。早急に何とかしなければ、取り返しがつかなくなる危険なモノだと。

母も同じことを考えたのだろう――奥の緋陵姫に声をかけた。

その声に、緋陵姫は何を感じたのだろうか。怯えきった目をして、彼女はその場を逃げ出し

た。

後を追う母が、彼女に何をするつもりなのかはわからなかったが、彼女を心から案じる思いだけは痛いほどに伝わってきた。

そうして、空也が知らせた場所の上空で、胸に届いた子供の悲鳴。

その声を、ラエスリールは知っていた。

濫花。

弟に酷似した半人半妖の子供――驚くべき速度で成長した子供のそれだった。

濫花に何が起こったのか、緋陵姫を庇うように佇むリーダイルの姿を目にした瞬間悟らざるを得なかった。胸が痛いほどに締めつけられた。

濫花の肉体を奪ったリーダイルが、敵意をむき出しにして母に襲いかかる姿を見るのも悲しかった。

止めようとする母の声は、弟の心には届かず、彼は攻撃を繰り返した。その姿は再会したばかりの頃の弟と自分の姿に重なって、見えぬ刃が胸を裂いた。

だが――そんな痛みなど、痛みの内にも入らないのだと、思い知らされたのは深紅の青年がその場に現れたときだった。

闇主！

思わず叫びそうになった。
この肉体の本来の意識が母でなく自分であったら、あの瞬間、意識は表出したに違いない。
激しい疑問と焦燥がラエスリールの心を責め苛んだ。
なぜ、彼がここにいるのか。
封じられた自分のそばにいないのはわかるが、なぜ――自分ではない者のそばに？
そう、一番大きな衝撃は、闇主のそばにひとりの少女の姿があったことだ。
闇主が「あなた」と呼び、気遣う漆黒の少女。
彼女は何者なのか。
なぜ、彼は彼女とともに現れたのか。
『……なぜっっ！　お前が……っ？』
一瞬だけ母を押しのけ投げた問いが、自分のものだとあの男は気づいたろうか。
それとも、自分が目の前にいることなど気づきもせずに、変わらずあの少女を労り続けたのだろうか。
どろりとした黒いものが湧き上がる。
イヤだ、と思った。許せないと。
そんなことが許せるはずがない。あの男が自分以外の誰かのそばにいるなど。自分以外の誰

かを労るなど。

出会ってすぐに、「ずっと一緒にいてやる」と言い出したのは闇主なのだ。

なのに、そばに来るまで時間をあけて、来たかと思えばまた姿を消した。自分に、彼がいることで感じる安堵を植え付けておきながら、勝手にそばから消えた彼を、どれほど憎く思ったことか。

それでも、求めて――捜すために浮城を捨てた。

あの時は、結局彼は姿を変えて自分のそばにいてくれたのだが。

今回もそうだとは思えない。いや、わかるのだ。

いやだ、いやだ、いやだ！

あの手が自分でない誰かの髪を撫でるのはイヤだ。

あの声が自分以外の誰かを呼ぶのはイヤだ。

何があろうと許せない。

お前はわたしのそばにいると言ったじゃないか。何度約束を破れば気が済むんだ？

嘘つきなその舌を引き抜いてやりたい。

自分ではない誰かを見つめるというのなら、深紅の瞳をえぐり出してやりたい。

誰かに触れる指は切り落とし、誰かを訪ねる足を潰し――かなうはずのないことを、それで

もこんなに強く望んだのは初めてのことだった。
お前は一緒にいると言った――ならば、お前がいる場所は、わたしのそばしかないんじゃないのか！
醜い汚泥のような感情が渦巻く中、ラエスリールの胸にひとつの決意が宿った。
何があろうと、お前をそばに取り戻す。
そして、取り戻したら、この生が尽きるまで――。
「お前はわたしのものだと、決めた」
真っ黒い感情の中で、固く固く、彼女は誓った――。

第二十七章　光の騙し絵

1

丸い部屋の扉の前には、見渡す限り漆黒の石が敷き詰められた空間が広がっていた。
どう考えてもカーヴィアのどこかとは思えない。
おそらくは妖鬼を追ってアーゼンターラたち四人が別行動に移ったあたりで、空間は現実のカーヴィアからどこか違う場所へと繋がれたのだ。
「ようこそ」
そう——艶然と微笑み、アーゼンターラを迎えた妖貴の女によって。
漆黒を纏う魔性と対峙するのは初めてではない。
だが、違う。
ラヴィスの街で、ひとびとを飢餓状態にして悦に入っていたあの妖貴——畢羅とは、何もかもが違って見える。
男女の別の問題ではない。

抱える闇の量、あるいは質とでも呼ぶべきものが、目の前の女性と畢羅では比べものにならないのだ。

畢羅の纏う黒が、煤を思わせる艶のないくすんだものだとすれば、この女性が纏うのは磨き上げられた宝石のような黒だ。それは美しいだけでなく、鋭利な刃に転ずるだけの力をたたえている。

格が違う、というのはこういうことかもしれない。

アーゼンターラが胸中で、そんなことを思った。

妖貴の実力差など見ただけでわかるはずもないと以前は思っていたのだが、こうして目にして初めて、そんなことはないのだとわかった。

妖貴に位階のようなものがあるかどうかは知らないが、あるとしたらこの女性はきっと上位に位置するに違いない。

呑まれては駄目。

気を抜けば、足が震えてしまいそうな、張り詰めた空気の中、アーゼンターラは自分を叱咤する。

いくらこの妖貴が強くても、自分が最終的に倒さなければならない相手より強いということはあり得ないのだ。

最後に目指す敵は紫紺の妖主。
ならば、妖貴を前に怯んでいてどうするというのか。
しっかりしなさい、あたし！
そんなアーゼンターラに、蜜里が心配そうな声をかけてくる。
「ターラ、大丈夫？」
幼い声も緊張で固くなっていた。
大丈夫よ、と無理矢理笑顔で答えようとしたときだ――腰の破妖刀がかたかたと震えだした。
上級魔性の命が大好物だという真紅の破妖刀――紅蓮姫は、相手を極上のご馳走だと認識したらしい……わざと音を立てているのは、アーゼンターラに対する催促だろうか。
早く食べさせろ、って言いたいの？
意志を持つとはいえ、紅蓮姫の意識の在り方は自分や魔性ともずいぶん違うのだ、と今さらながらに思い知らされた。
もっとも、かつて白焔、紫紺、翡翠の妖主の命を啜ったこともある経験があればこそ、だろうか。
今度、オルグァンとスラヴィに、氷結漸と夢晶結はどうなのか、聞いてみよう……。
少しだけ遠い目をして、アーゼンターラは用心のため、紅蓮姫の柄から手を放した。勝手に

飛び出して襲いかかられてはたまらない。
この女性には、尋ねなければならないことがあるのだ。
カーヴィアを襲った大災禍――十万もの民の意識を奪ったのは、彼女本人なのかどうかを。
もしもそうなら、戦いは避けられない。
とは言っても、その幕を開けるのが破妖刀の暴走というのでは、破妖剣士として情けなさ過ぎる。
「紅蓮姫、少しは落ち着いてちょうだい」
こんなことじゃ、抜くに抜けないじゃない。
小声で囁きかけたのだが、どうやらそれは相手には筒抜けだったらしい――けっこう距離があるというのに、黒髪の美女はくすくすと笑い出した。
「それが、我が君の命の幾ばくかを奪ったという破妖刀だね？　なるほど、わたしは随分美味しそうに見えるらしい。光栄と言っておこうか……もっとも、ご馳走してやるほど親切ではないのだがね」
女性としては、いささか固い言葉遣いだが、不思議とその女性には似合っている。
言っていることももっともだ。
逆を言えば、余裕を失わない程度の相手だと、彼女が自分たちを見なしているということだ

が。

しかし、それは仕方のないことだ。

紅蓮姫の使い手としての自分に、ラエスリールのような実績はない。唯一畢羅を倒したのが実績と言えなくもないが、目の前の彼女にとってそれが評価の対象になるかどうかはいささかどころでなく疑問だ。

それでも。

進むべき道は、すでに定めた。

そうである以上、誰が何と評そうが、するべきことは変わらない。

「カーヴィアのひとたちの影を奪ったのは、あなたなの？」

声が硬くなるのを感じた。

もしも肯定の答えが返ってくれば、それはそのまま戦闘開始の合図となる——浮城の破妖剣士として、自分は確かにカーヴィアの皆を救うために、全力を尽くすと誓ったのだから。

だが、予想した——覚悟していた、と言うべきか——答えは返って来なかった。

「いや？　評価してくれるのは嬉しいが、それは過大評価というものだ。わたしには、一度に十万もの影を奪い、尚且つ管理することはできないからね」

女性の言葉に、アーゼンターラは胸が跳ねるのを感じた。

この強大な力を感じさせる妖貴の女性――彼女に無理だというのなら、いったい誰であれば可能なのか。

「できるのは、誰？」

突っ込んで尋ねた彼女に、漆黒の女性は驚いたように一瞬目を瞠り、それから呆れたような笑みで応じた。

「お前たちの出迎えを、いったい誰がわたしに許してくれたと思ってるんだ？　ああ、言い方を変えようか。このわたしの行動を制限できるお方はこの世にひとりしか存在しない。ここまで言ってもわからないというのなら、そんな馬鹿に答える義務はないと言うぞ？」

どくり。

心臓が苦しいほどに激しく脈打つ。

圧倒的な力を放つ妖貴の女性が、カーヴィアの住民全員の影を奪うのは無理だと言う。

その彼女に、自分たちの『出迎え』――死んでも可笑しくない罠と呼ぶのが相応しいとアーゼンターラは思うのだが――を許したのは、彼女にとっての唯一の存在だと。

ならば、それは――それ、は。

まさか。でも、それならば。

期待と不安が相半ばする――それなら、自分は最終的な目的をも、この一件で果たすことが

できる。

だが、同時にそれは、目前の強大な妖貴にすら「無理だ」と言うことを可能にする相手が敵だとはっきり明かされることを意味する。

知るのが怖い。

けれど、その答えを得なければ、前に一歩も進めない。

アーゼンターラは深く息をついて、目の前に佇む妖貴の女性に真っ直ぐに問いかけた。

「カーヴィアの災禍は……紫紺の妖主の仕業なの？」

妖貴の答えは少し的外れな、だが勘違いしようもないものだった。

「紫紺の君と呼びなさい」

意識を失わないために、アーゼンターラは凄まじい努力を強いられた。

※

衝撃は大きく、受け止めるのに時間がかかった。

想像や期待で覚悟を決める時、相手の力を軽く見積もるつもりはなくとも、自然とそうしてしまうのだと……アーゼンターラは悟った。

カーヴィアの件を聞いた時、そして邪羅から情報をもらった時、どうせならカーヴィアを襲った災禍の主が紫紺の妖主であればいい、と思った。

それならば、問題は一気に解決できると思ったのだ。

大変なことはわかっている。

だが、カーヴィアの件とリメラトーンのそれの、元凶がひとつであるならば、自分は浮城の破妖剣士としての務めを裏切ることなく、両方を救うことができる、と。

都合のいいことを考えた。

ところが、現実となってみればどうだ。

都合がいいどころの話ではない。

がくがくと、妖貴の前だというのに、全身が震えそうになるほどの衝撃を受けている。

カーヴィアを襲ったのは紫紺の妖主そのひとだった。

カーヴィアの住民十万の命と、リメラトーンのそれ——両方を救うためには、世界に五人しかいないという魔性の王のひとりである彼を倒さなければならないのだ！

その事実の重み。

今の今まで、どこか他人事のように感じていた事実の重みにアーゼンターラは押しつぶされそうな圧迫感を覚えた。

本当に、この自分が紫紺の妖主と対決するのだ。
この目の前の、気配からしてこれまで出会った魔性の誰より強大な気を放つ女性が、迷いもなく「我が君」と呼ぶそのひとと。
おそらく、その前に彼女とも争うことになるのだろう。
死を覚悟しなければならないほどの戦いに。
そうと理解した瞬間、心の嵐は静まった。
死ぬかもしれない——そう感じさせるだけの力を、目の前の妖貴の女性はたたえている。
だが、死なないかもしれない。
目の前の彼女の力が圧倒的であっても、最初から負けると決めつけなければ、別の未来があるかもしれないのだと、唐突に思った。
弟を救うために倒すべき相手が、明確に示されたがゆえにそう思えたのかもしれないが。
そのためには、その前に立ち塞がる相手を恐れてなどいられない。
そう——それは、この恐ろしいまでの力を誇示する女性が相手であっても同じことだ。
すとん、と心が落ち着いた。
そうしたら、不思議なことに、アーゼンターラは静かな気持ちで素朴な疑問を件の妖貴にぶつけることができたのである。

「……それで、あなたはここでわたしと何をするつもりなのかしら？　時間稼ぎのおしゃべりなら、遠慮させてもらいたいわ。わかっているでしょうけど、わたしたち、急いでるの」

場所も相手も関係なしに、食欲魔神ぶりを発揮する紅蓮姫のおかげだろうか、最初に感じた緊張は解けていた。

この言葉に、妖貴の女性は笑いながら両手を広げた。

「もちろん、わかっているとも。我が君の璃岩城への扉は、わたしの背後にある。お前は一刻も早くその扉を抜けて我が君のもとへ辿り着きたいと思っている」

あけすけにそんなことを口にするのは、絶大なる自信の顕れだろうか――それとも、言葉に罠がひそんでいるのか。

アーゼンターラには判断する材料がない。

思わず蜜里に目を向けたものの、生まれて数年の妖貴に、長い時を生きた先達の言葉の真偽を測れというのは無理な話だ。

「……素直に通してくれる気はある？」

尋ねはしたが、その可能性は限りなく低いとアーゼンターラもわかっていた。

女性は紫紺の妖主を「我が君」と呼んだのだ、主人の命を狙う破妖剣士を、素直に通すはずがない。

だが――。

女性の返答は、完全にアーゼンターラの予想を裏切るものだった。

「いいだろう、通りなさい」

意外などというものではない。

「本気なの？」

思わず洩れ出たアーゼンターラの問いに、女性は仕方なさそうに肩をすくめた。

「もちろん、本音を言わせてもらうなら、我が君を害する意図を持つお前を、このままむざむざ見逃したくなどないよ。この場で千々に引き裂いてしまいたいぐらいだ」

だが、と女性は実に残念そうに息を洩らした。

「わたしの関与が認められるのはここまでだ。これ以上の手出しは我が君から禁じられてしまったのでね」

俄には信じがたいが、嘘を言っているようには見えなかった。

それでもすぐには動けずにいたアーゼンターラの様子に、説明が足りないと思ったのか、女性は仕方ないとでも言いたげに言葉を続けた。

「お前たち人間の主君に対する忠誠心がどれほどのものかはここでは触れないが、我らの忠誠は我らの誇りそのものでもある。輝かしき唯一の主を得る至上の喜びは、きっとお前たちには

わからないだろう……それゆえに」

一旦言葉を切った妖貴の漆黒の双眸に、痛みにも似た光が走った。

「我らにとって、主の言葉は絶対なのだよ。我が君が客人だと言ったお前を、これ以上わたしがどうこうするわけにはいかないのだ」

残念だ。

絞り出すような声は苦しげですらあった。

信じていいのだろうか——アーゼンターラは迷った。

いくら真摯な態度を見せられ、信じるに足る言葉を与えられたとしても、相手は魔性だ——頭から信じきることは難しい。

けれど——。

彼女の向こうに、紫紺の妖主がいるのだ。十万の命と弟のそれ、両方を取り戻すには、前に進むしかない。

そう思い、一歩を踏み出したアーゼンターラは、ふと心にかかることがひとつ残っていることに気づいた。

カーヴィアの街で別れ別れになったチームの面々のことだ。

彼らなら大丈夫——自分よりずっと上手に事態を切り抜けているはずだ。だから、尋ねるま

でもない。

そう思いはしたものの、気になるのは仕方ない。

思わず立ち止まり、アーゼンターラは妖貴の女性に問いかけていた。

「スラヴィたちは、無事に街に戻れたのよね？」

この問いに、妖貴は心底不思議そうな顔をした。

「どうして、そんなことを聞く？」

「どうしてって……スラヴィたちとは街で別れたきりだし――」

今回の事件の黒幕が、紫紺の妖主本人だと聞いたばかりだ。

その配下が相手ならともかく、妖主本人と戦うとなれば、その負担は大きすぎる。

そんな騒ぎには巻き込みたくない。

知らず、そう思っていたから、彼らの不在をアーゼンターラは気に留めなかったのだ――否、あえてその不在を喜んで受け入れた。

だが――。

ぞくり、とイヤなモノが胸に這い上がってくるのを感じた。

――どうして、そんなことを聞く？

問い返してきた妖貴の女性の声に、何かはわからないが得体の知れない恐ろしいものが含ま

れていたような気がしたのだ。
果たして、その予感は当たった。
漆黒の女性は、心底不思議がる様子でこう問いかけてきたのだ。
「お前が不要と断じて切り捨てた輩だろう？　なぜ今さら気にかける？」
アーゼンターラは目の前が真っ赤になるような怒りを覚えた。
「切り捨ててなんてないわ！　スラヴィたちのこと、要らないだなんて思ってない！」
それは真実、心からの思いだった。
だが、妖貴は残酷な事実を淡々と告げてきたのだ。
「わからないことを言うね。ならばなぜ、お前はあの扉をお前たちふたりだけでくぐってきたんだ？」
あの扉――？
思い浮かんだのは、この空間に繋がる扉のあった円形の部屋だ。
妖鬼を倒した先にあった扉の前にあった部屋。奇妙な光のせいで、視界を邪魔されて、ようやくここに繋がる扉を見つけた。
妖貴の女性は、その扉のことを言っているのだろうか？
「だって、他に扉なんかなかったわよ！」

噛みつくように反論すると、妖貴の女性は哀れむような目を向けてきた。
「扉同士の角度に気づけば、他の扉の存在に気づくこともできただろうに……目的だけを目指す瞳は、何よりも単純に前に繋がる道を選んだのだね」
あの円形の部屋には、お前たち全員が揃うための扉があったのに。
全員揃って、ここに到る扉をくぐる道も残されていたというのに。
「お前の先走りが、彼らの世界を閉じたのだよ」
寛容に、前に進むことを勧める女性の姿はもはやない。
アーゼンターラは全身が凍りつくような衝撃を覚えた。
この空間そのものが。
罠でできていたのだ――。

2

「閉じたとはどういうこと？」
振り返ったまま、アーゼンターラは妖貴に問いかけた。
この場に繋がる一度きりの唯一の扉――それを自分と蜜里だけでくぐったことが、スラヴィエーラたちの世界を閉じたのだと、漆黒の女性は告げた。
その意味するところは何なのか。
先に進むより前に、そのことだけは聞いておかねばならないと思った。
妖貴の女性は、何でもないことのように、「閉じたものは閉じたのだよ」と答えた。
こちらの苛立ちに気づいていて焦らしているのか、それとも本当にアーゼンターラの態度が理解できずにいるのか――そのどちらであるのか、焦りを覚える彼女にはわからない。
「彼らは、今どうしているの？」
じりじりと焦りを覚えながら、アーゼンターラは尋ねた。

女性が真実を語るとは限らない——それでもここで、彼女の問いに答えられるのは黒髪の魔性だけなのだ。

女性が小さく口の端をつり上げた。

「いま？　戦っているよ」

見るかい？

そう言うなり、妖貴の背後に三つの巨大な鏡のようなものが現れた。

そこに映し出される映像に、アーゼンターラは息を呑んだ。

スラヴィエーラが、妖鬼を相手に夢晶結を振るっている。

オルグァンが部屋の住人が眠る寝台を背中に庇いながら、妖鬼が呼び出したのだろう小鬼の群れと戦っている。

マイダードが、広間のような空間に渡された細い通路で、額に透明な角を持つ妖鬼の女性と対峙している。通路を外ればそこは奈落だ。ぽっかりと大きく口を開いた闇に、果たして彼は気づいているのだろうか。

「スラヴィ！　オルグァン！　マイダード！」

偽りの映像とはとても思えなかった。

悲鳴に似たアーゼンターラの声に、妖貴は楽しげに笑った。

「力のほどを見せてもらうだけのつもりだったんだが、なかなか楽しませてくれる者たちだね。わたしの援護があるから、妖鬼たちだって普通より五割増し強くなっているはずなのに、堂々と渡り合っている」

だが、と残念そうに続けられた言葉に、アーゼンターラは唇を噛みしめた。

「可哀相だが、彼らは勝利しても何も得ることはできない。ひとつきり、一度だけ開く扉はすでにお前が開いてしまったからね」

彼らは永遠にあの空間を彷徨うだけだ。

愕然とした。

「現実世界に……カーヴィアに戻るのではないの⁉」

アーゼンターラの問いに、妖貴は心底不思議そうな顔をした。

「なぜ？　お前たちは四人でカーヴィアを訪れた。だからわたしは平等に試験したつもりだよ？　合格したのはお前だけなのだから、あの三人は自動的に不合格判定ということになる。それぐらいのリスクは当然負って然るべきだろう？　わたしが用意したご褒美は、そんなに安いものではないよ」

確かにそれはそうかもしれない。

妖貴が示したのは、紫紺の妖主の居城への直通の扉だ。

だが、だからといって納得できることではない。

「ならば、あたしは戻るわ。戻って皆が揃うのを待つわ！」

アーゼンターラのこの言葉に、妖貴は呆れた顔をした。

「馬鹿を言ってはいけないよ。試験が終わったあとで、正解がわかったからと言って、答えを直すなんて真似は、人間の世界でも認められてはいないはずだ。そういう行為は、確か不正というのだろう？」

妖貴が痛いところを突いてくる。

だが、アーゼンターラも負けてはいなかった。

「試験内容の説明が不十分だわ！　その非はそちらにあるのではないの⁉」

魔性相手に訴えても無駄なことは百も承知だ。

彼らは自分のやりたいことをやりたいようにやる。それこそ人間など塵芥程度にしか考えていない。

それでも、妙に規則に拘る風のこの妖貴なら、あるいはそこを突けば某かの譲歩が得られるのではないかと思ったのだ。

もっとも、それが甘すぎる期待だったと、彼女はすぐに思い知るのだが。

「馬鹿を言うのではないよ、紅蓮姫の使い手。気を配れば気づく材料を、わたしはちゃんと用

意していたはずだ。それに気づかなかったのはお前の不注意と未熟、こちらが責めを負う必要はない」

それに――と、女性は楽しげに続けた。

「お前は戻ると言うけれど、すでに戻るべき道はない」

見るが良い――。

そう言って、妖貴が指し示したのは、先ほどアーゼンターラたちがいた場所だ。

そこに在ったはずの扉は姿を消していた。

「一度きり開く扉だと言ったろう。開いてしまえば、あとはもう用はない。務めを終えた扉は消え失せるだけだよ」

だから、諦めなさい。

妖貴の声は優しくさえあった――あたかも唆すかのような響きだと感じたのはアーゼンターラの穿ちすぎだろうか。

「いいえ――いいえ！」

激しく頭を振り、彼女は漆黒の魔性の言葉を拒絶した。

ここで頷くわけにはいかない。それは仲間たちを、妖貴が作り上げた空間に永遠に閉じ込めるということだ。

アーゼンターラひとりで紫紺の妖主と対峙するために、彼らを巻き込まないというのとは明らかに違う。

考えろ、考えるのよ。

必死にアーゼンターラは自分に言い聞かせる。

道はないと、妖貴は言った。

だが、本当にそうだろうか？

もし、本当に他に方法がないのなら、妖貴はわざわざそのことを強調したりするだろうか？

自分にそう信じこませるために、ことさら間違いは正せないと言っているのではないのか？

だが、それが希望的観測である可能性もある。

どちらだ？

何が正解なのか？

考えろ、考えろ――唇を噛みしめながら、アーゼンターラは思わず胸元に手を当てた。

そこで――気づいた。

いや、忘れていた物の存在を思い出したのだ。

紅蓮姫の使い手――と、女性は自分をそう呼んだ。確かにそうだ。間違っていない。

けれど、自分はそうなる前は、別の呼び方をされていた。そのことを、その時に振るってい

た力をも惜しまず使うということを、自分は前回の仕事で選んだのではなかったか。
持てる力は余さず使う。
……今の今まで、焦りに目を曇らされて、そんなことまで忘れていたとは、やはり自分は頭が悪いのだと思った。
「諦めない」
はっきりと言い切り、アーゼンターラは懐に手を伸ばした。
「諦める必要もないわ」
取りだしたのは手製の螺旋杖――今回の依頼のために、頑張って作ってきたのだ。
「扉は消えても、扉があった事実は動かない」
そうである以上、空間は扉が開いた記憶を持っている。
螺旋杖に刻まれた螺旋の溝は、あらゆることを読み解くものだ。ならば、空間の記憶を読み解き、さらにその時のことを現象ごと引き寄せればいい！
そうすれば――。
「扉が開いた状況を再現することができるわ！」
叫びながら、アーゼンターラが螺旋杖に意識を集めようとした瞬間だった。
ぱりん、と乾いた破裂音が空間に響いた。

螺旋杖が粉々に砕け散ったのだ。

「やれやれ、とんだ隠し武器を持っていてくれたものだ」

指一本動かした様子もない妖貴の、だがその言葉で破壊したのが彼女だと知れた。

興奮しすぎたらしい——言わずにいいことまで口にしてしまったようだ。

だが、この一件でわかったこともある。

「これ以上の手出しは禁じられてると言っていなかった？」

自らの発言と矛盾する行動を取った妖貴に問いかけると、相手は「そうだが」と前置きをした上で、こう答えた。

「扉までは、わたしの関与は認めていただいている。それが閉じた以上、手出しはできぬと言ったわけだが……それを再現するというのなら、わたしにも関与の権利が戻ってくるというわけだよ」

やはり、妖主に近しい妖貴は一筋縄ではいかないらしい。

「まだ、再現してなかったわよ？」

「それはわたしの望むところではないからね。邪魔させてもらう」

言って妖貴はくつりと喉を鳴らした。

本気で楽しそうだ。その刹那、漆黒の魔性の気配が一変した。

それまで、妖貴からはひとかけらも感じられなかった殺気が空間全体に溢れ出し、その場を支配したのである！

ぺろり、と女性が唇を舐めた。

「金の姫君とは比べものにもならぬ小物だと思ったが……姫君にはない小賢しさと小技を持っているようだ。人間の一番油断ならない部分を持っているとわかった以上、本来ならばここでわたしがお前の息の根を止めるべきなんだろうが、ね」

本気で残念そうな光を瞳に宿しながら、彼女は続けた。

「扉の再現に関すること以外の干渉は、やはりわたしには許されていないのだよ。だからお前が諦めるまで、お前の努力を無駄に終わらせてもらう」

こともなげに告げられた内容に、アーゼンターラは唖然とした。

妖貴は自分の心を折ると言っているのだ。

どれほど努力しても、そんなことは無駄だと思い知らせると、そう宣言しているのだ。

そんなに簡単にへし折られてたまるものですか！

喉元まで飛び出しかけた反論を無理矢理呑み込んだのは、確かに目前の妖貴ならそれが可能だと思ったからだ。

いくら螺旋杖があっても——意識を添わせれば、消えた扉を再現できるといっても、そのた

めの時間が許されなければ意味がない。
しかも、螺旋杖の数は無限ではない。
砕かれる数だけ、この先の戦いの勝率は激減する。
どうすれば、いいのか。
答えは、たったひとつしかなかった。
アーゼンターラは護り手である少女に声をかけた。
「蜜里」
漆黒を纏う魔性の一員である少女は、にこりと笑って応じた。
「わかってる」
その笑顔の、あまりに曇りのない明るさに、アーゼンターラは胸を衝かれた。
生まれて間もない彼女は、初めて目にした他者である自分に過剰なほどに懐いてきた。純粋過ぎるほどに純粋な好意だけを、自分ひとりに向けられるのが嬉しくて、そのことにいつしか感謝も忘れてただ受け入れていただけのように思う。
魔性はずる賢い——魔性は油断ならない。
世間で言われている常識は、もちろん知っているし、現実に近い事実であることもわかっている。

それでも、ちらりと思ってしまうのは、自分が蜜里という例外的な魔性を知っているからかもしれない。

本当に魔性の本性は狡く油断のならない……残酷なものなの――？

秘めた問いを外に対して放ったことはなく、だから答えはないのだけれど。

「お願い」

そう告げて、アーゼンターラは紅蓮姫の柄に手をかけた。

真紅の破妖刀を抜き放つ！

そして、唯一の護り手へ告げた。

「あなたの背中はあたしが守る！　だから、お願い……みんなをここに連れて来て！」

※

本当に小賢しい。

津々螺はアーゼンターラの行動を苛立たしく思った。

適当に信じればいいのだ。

人間というものは、そういう生き物だと津々螺は認識している。

信じたいと思うことを信じ、受け入れがたい、受け入れたくない何かを孕んだ事象は絶対に受け入れない。

そうした生き物なのだと、津々螺は思っている。

だから、それに逆らおうとするアーゼンターラが気に障るのだ。

一度閉じてしまった扉――取り返しのつかない選択。

その結果をなぜ素直に受け入れようとしないのか。

それどころか、彼女はやり直そうとしている。

一度なした選択を、なかったものとして……否、間違ったものとして、新たにやり直そうとしている。

そんなことを許すつもりがない自分という存在を認識しておりながら、絶対的強者である自分の存在を認めながら、彼女はやり直そうと本気で思っているのだ。

そんなことが許せるはずがない。

許せば、たかが人間の抵抗が無意味ではないことを認めることになってしまう。

自分が認めるようなものを何も持たぬ人間が、抗うことを諦めない――それだけのことで、何かを成し遂げてしまうなど、到底許せることではない。

思いもかけない相手の反応と選択――それが、絶対的優位に立っていると信じている津々螺

の感情を乱した。
　押しつぶしてやる。
　期待も希望も生きる意味さえ――何もかも、粉々にすりつぶしてやる、とこの時津々螺は決めた。
　ただの人間に対して、ここまで純粋な悪意を抱いたのは、彼女自身初めてのことだったかもしれない……。

3

蜜里が、扉の在った空間に向かって螺旋杖をかざすその背中合わせに立ち、アーゼンターラは紅蓮姫に言い聞かせた。

「いい？　蜜里を狙ったりしたら二度とご馳走にはありつけないと思いなさい。あと、食欲に目が眩んで蜜里のそばからあたしを放そうとするのも駄目よ。このふたつを守ってくれたら、あとでいくらでも暴れさせてあげる」

かつて、蜜里の命欲しさに、ラエスリールの肉体という鞘から姿を現したという破妖刀に、これだけは言っておかねばならなかった。

上等な命なら誰のものでも構わないと言われては、この先安心して戦うこともできないのだから。

「今回の相手は紫紺の妖主なんですって。あなたは一度味わったはずでしょう？　あれをまた食べたくはない？」

真紅の刀身が、ひときわ輝きを増す。
どうやら妖主の命は、美食家――アーゼンターラにとっては悪食以外の何ものでもないのだが――の破妖刀にとっても忘れられない味だったらしい。
暴れようと小刻みに震えていたのがぴたりと止んだ。
現金な反応に、アーゼンターラは呆れると同時に安堵した。
これなら、食欲魔神になって暴走することはなさそうだ。彼女の暴走は洒落にならないぐらい激しい……押さえるためだけに渾身の力が必要なのだ。
先がある今、そういう力の無駄遣いは極力省きたいアーゼンターラにとって、珍しくも聞き分けのよさを発揮してくれた紅蓮姫の態度はありがたい。
……まあ、本番で思い切り暴れられちゃうんでしょうけど……。
その時のことを考えると頭が痛いが、先のことは先のことだ。
「良い子ね」
短く告げて、アーゼンターラは破妖刀を構えた。
対峙する妖貴は、いまの遣り取りにはっきりと不快を示していた。
「我が君の貴いお命を、破妖刀の餌扱いとはいただけないね。おまけに奪えるつもりらしいというのが腹立たしい。やはり、ここで刻んでしまおうか……」

主君への侮辱――と、彼女には感じられたらしい――に、妖貴の瞳に怒りが燃える。
ぞっとするほどの妖気が周囲に溢れ出し、アーゼンターラは噎せそうになった。
感情を解放しただけでこの圧迫感。
やっぱり、この妖貴は畢羅より格段に強い！
今さらながら、そのことを思い知らされ、アーゼンターラは唇を噛みしめた。
だが、退けないのだ、今度ばかりは。
スラヴィエーラたちの命がかかっている。
あるいは彼女たちがこの場にいたら、構わず進めと言うかもしれない。
『あんたが突っ走るのはいつものことだろ？　こっちはこっちで何とかするから、さっさと行っておいで』
とでも。
口調までも想像できる。
だが、今回だけは話が違う。アーゼンターラはこのままでは先に進めない。
自分のことで精一杯で、周囲を見回す余裕もなかった自分を、三人はずっと静かに見守ってくれてきた。
何のためにチームを組んでいるのかと、怒鳴りつけたいこともあったろうに、それでも彼ら

はアーゼンターラが自ら気づくのを辛抱強く待ってくれていたのだ。
そんな彼らを、自分の未熟さのせいで失うなど、あってはならないことだ。
何が何でも取り返す――そして、今度こそチームとして紫紺の妖主と戦うのだ。
アーゼンターラがそんなことを考えていた時のことだった。
そばで風圧のようなものを感じたと思った次の瞬間、腕にざっくりと傷が走った。
しまった！
妖貴が動いたわけではない。彼女は元の位置から一歩も動いていない。それで充分なのだとアーゼンターラは気づいた。
紫紺の妖主は糸を操るって、邪羅が言っていたのに！
その配下が同様に糸を操るとしてもおかしくはない。いや、カーヴィアの街中に現れた光の柱は、光を絡めた糸だと蜜里が言っていたではないか。
妖貴は糸を操り、離れた場所から攻撃を仕掛けることが可能なのだ！
意識を研ぎ澄ませる。
攻撃の気配を少しでも感じ取れないかと思ったが、妖貴が放った妖気があまりに濃厚すぎて、糸の動きを察知できない。
もしかしたら、そこまで狙って妖気を放ったのかもしれない。

なんて巧妙なの!?　これじゃ、あたしは斬られ放題ってことじゃないの！

紅蓮姫があっても、近づかなければ脅威とはなり得ない。だが、蜜里の背中を守らなければならない今、妖貴に駆け寄ることはできないのだ。

どん、と今度は鈍器で殴られるような衝撃を足に感じた。

糸は、斬るばかりではなく、そうした使い方もあるらしい。

痛みに顔を歪めながら相手を見れば、妖貴の女性は涼しい顔だ。あからさまに勝ち誇ったりしないあたりが、憎らしいと同時に恐ろしい。

この程度のことは、彼女にとって何でもないことなのだ。

何でこんなに強いのに、人間を玩具にできるのよ!?

八つ当たりめいた怒りがふつふつと湧き起こる。これほどの力があれば、人間など無力以前の存在としか思えないだろうに、彼らはなぜ、人間にこだわるのか。

「どうした？」

傷が増えていくアーゼンターラに、妖貴が声をかけてくる。

「突っ立ったままでは、傷は増える一方だよ？　少しは躱さないと、お嬢さんの仕事が終わる前に失血死してしまうよ？」

気遣うように見せかけた、嬲るための言葉だった。

「わかってるわよ！」

答えながら、アーゼンターラはいつ、どこから来るとも知れない攻撃を、どうやって躱すかを必死に考えていた。

妖貴の言うとおり、このままでは埒が明かないのは確かなのだ。

だが、反撃に転じることはできない。自分が妖貴に近づく前に、その攻撃が蜜里の無防備な背中を襲わないとは限らないのだから。

いや、それを誘うための言葉なのか。

だとしたら、尚更動くわけにはいかない。

そう思った時、また不可視の攻撃が肩を襲った。

「く……っっ！」

せめて、今の糸だけでも切ってしまわないと——糸の数を減らすのが果たして効果をもたらすのかどうかはわからない。

妖貴は無限に糸を繰り出すことが可能なのかもしれないのだから。だが、何もしないまま傷を増やすばかりというのではあまりにも悔しい。

アーゼンターラはむやみやたらに紅蓮姫を振り回した。

傍目にはさぞ滑稽に映っているだろうことはわかっていたが、それでも糸の進路妨害ぐらい

にはなるかもしれない。
妖貴が呆れたように呟いた。
「……無様だねえ」
「自分でもわかっているから、わざわざ指摘してくれなくても結構よ！」
怒鳴り返しながら、なおも紅蓮姫を振るった時だ。
キン。
金属同士がぶつかったような、甲高い音がその場に響いた。
「なに？」
確かに何かにぶつかった。
だが、その意味するところは何なのか。
アーゼンターラは必死に考えた。
糸は金属製なのだろうか？　だから、ぶつかった音がしたのか？
だが、手応えが違う。あれは糸のように細い何かではなかった。もっと硬い……そう、たとえれば石か金属にぶつかったような……いや、ぶつかり合ったような……？
妖貴に目を向けても、彼女が答えをくれるはずはない。そうとわかりつつも、彼女は思わずそちらに目をやり――そして。

気づいた。
漆黒の女性の双眸に、先ほどまではなかった苛立ちの色が浮かんでいることに。
何かある――。
それは直感であり、確信だった。
考えるのだ、螺旋杖に巻き取った情報を読み解くように――答えはきっと見えるはずだ。
ザシュリ。
新たな傷が走った。
それは、糸というより、刃物で斬りつけられたようなものだった――。

※

蜜里は焦っていた。
螺旋杖を使うのは初めてではない。これを使えるのはアーゼンターラを除けば、自分しかいないのだ。
そのアーゼンターラが螺旋杖を使えない状況にある以上、自分が読み解くしかない。
早くしなければ――そう思えば思うほど、アーゼンターラほど上手に扱えない自分への苛立

ちが募る。

背後から漂ってくる血臭に、蜜里の焦りは大きくなる。

これはアーゼンターラの血だ。

アーゼンターラが傷ついている、この自分の背中を守るために！

自分こそが彼女を守らなければならないのに！

生まれて間もなく目にしたのは、銀髪紫瞳の少女の顔だった。

一目で惹かれ、そばにいたいと思った。彼女が人間であり、自分とは寿命も何も違う存在であることは感じていたけれど、そんなことは蜜里には関係なかった。

人間が短命であるというのなら、尚更その短い時間をそばで過ごしたい。人間が弱いというのなら、そばでずっと守ってやりたい、そう思った。

もっとも、アーゼンターラは無力とは言い難い異能の持ち主だったのだけれど。

四年前のあの夜、自分は彼女たち姉弟を守ることができなかった。村を襲った妖貴の仕業であろう罠にかかり、意識を奪われていたのだ。

意識を取り戻した時、全てが変わってしまっていた。

村は炎の中に消え、リメラトーンの姿は消えていた。傷つきながらもアーゼンターラの無事を目にした刹那の安堵と歓喜は忘れない。

だが、彼女もまた変わっていた。

村と弟を失ったのは自分のせいだという罪悪感から、自らの記憶を書き換えていたのだ、自分はリメラトーンなのだと。

村を襲った魔性への憎悪は、蜜里への不信という形で顕れた。

それからの三年間、大好きだった少女は永遠に失われてしまったのではないかと、何度も絶望しそうになった。けれど、いくら記憶を塗り替えたところでアーゼンターラはアーゼンターラで……そのかけらを見つける度に、蜜里は心に誓ったのだ。

二度とアーゼンターラにあんな思いはさせないと。

今度こそ、自分が彼女を守るのだ、と。

一年前、ようやく彼女は戻ってきた——破妖刀紅蓮姫に選ばれるという、過酷な運命を伴って。

以来、アーゼンターラは以前以上に傷つくことが多くなった。その度に、誓いを守りきれない自身の不甲斐なさを蜜里は痛感させられたものだ。

けれど蜜里が自分を責めることを、アーゼンターラは良しとしなかった。

気持ちは嬉しいけれど、守られるだけのつもりはないのだと。自分もまた蜜里を守りたいと思っているのだと。

涙が出るほど嬉しかった。
自分を信じてくれる彼女を、決して裏切るまいと誓った。
何度も、何度も誓いを重ねてきた。
それなのに——今。
アーゼンターラが自分のために傷ついているのに、彼女の傷を癒すことも、彼女を傷つける敵を倒すこともできないのだ。
螺旋杖に巻き取られた情報を読み解き、閉じた扉を再び開くことを託されているのだから。
自分ならできると、信じて任せてくれたアーゼンターラの期待に応えたい。
一刻も早く扉を開いて、彼女を仲間と会わせたい。
だけど——ああ、どうして！
蜜里は泣きそうになりながら、読み解けない情報を並べ直した。
やはり、何度繰り返しても情報がひとつにまとまらない。
「どうして」
唇を噛みしめながら、蜜里は呻いた。
「扉の記憶が四つもあるの……!?」
これではどの扉を再現すればいいのかわからない。

機会は恐らく一度きりだというのに――あの妖貴が四つもの扉の再現を黙って許してくれるとは思えない。
どうしよう……。
黒髪の少女は途方に暮れて螺旋杖を見つめた。

※

アーゼンターラははっとした。
背後の蜜里が呻くのが聞こえたのだ。
どうして、扉の記憶が四つもあるの……!?
彼女の洩らした一言に、アーゼンターラの脳裏にひとつの仮定が浮かんだ。
自分も蜜里も、妖貴の言葉を信じすぎているのではないかということだ。
そもそも、彼女の言葉に嘘がないなどと、どうして思い込んだのか……振り返ってみれば、すぐに答えは出た。
彼女が口にした言葉だ。
『わたしの関与が認められるのはここまでだ。これ以上の手出しは我が君から禁じられてしま

ったのでね』

『我らにとって、主の言葉は絶対なのだよ。我が君が客人だと言ったお前を、これ以上わたしがどうこうするわけにはいかないのだ』

主への賛美を隠しもしない声と口調で告げられた内容は、到底嘘とは思えなかった。

だが、嘘でなかったのはこの言葉だけではなかったのか。他の言葉まで真実だとは限らないのではないのか。

相手は魔性で、しかも経験豊かな妖貴なのだ。

どれほどの奸智に長けた主であってもおかしくはないのだ。

では、彼女は何を企んでいるのか。

主人である紫紺の妖主の命令に反さないやり方で、自分たちを片付けようとしているのではないか。

そもそも、自分に背後の扉に進むように言いながら、彼女の態度はどこか意味深長で、それが気になってスラヴィエーラたちのことを尋ねようと思ったのだ。

そうして返ってきた答えゆえに、先に進むことを止めたのだ。

もしかして、とアーゼンターラは思った。

自分の下した決断に悔いはないが、あれはこちらの事情を知る妖貴の言動によって誘導され

た結果ではないのか。
仲間を見捨てることはしないと、見抜かれた上で彼女の用意した舞台に自分たちは自ら乗ったのではないだろうか。
そう考えると腑に落ちることが幾つもある。
扉を再び開くと宣言した時、確かに彼女はそれは困ると、邪魔させてもらうと言いきった。
事実、螺旋杖は砕かれた。
だから、自分は螺旋杖を蜜里に委ね、その少女の背中を守ると決めたのだ。
蜜里の背中を守る盾になるのだと。
だが、考えてみれば、それからの妖貴の攻撃は驚くほどに単調なものだった。
不可視の糸を自在に操る魔性なら、自分を避けて蜜里に攻撃を加えてもこちらは防ぐことはできないのに、そうしたことは一度もなかったのだ。
また、糸の攻撃も生温いと言えないこともない。
最初の一撃で、アーゼンターラの腕を切断することも、次のそれで彼女の足を完全に砕くこともこの妖貴であれば可能だったはずだ。
それをしなかったのはなぜか。
考えられる可能性はふたつ――。

それを彼女が望まなかったか、望んでもかなわなかったか、どちらかだ。
前者であれば、彼女は蜜里の邪魔をする気は本当にはないということだ。その先の意図まではわからないけれど。
後者の場合、彼女の意志にかかわらぬ何らかの要素、もしくは力がこの空間には存在するということだ。
そこまで考えた時、アーゼンターラは記憶を刺激された。
カーヴィアの街に入ってすぐのことを思い出す。
街の中心に突然出現した光糸の柱。
ここに来いと誘いかけるように、光り輝いていたあの光柱――。
そこを目指すつもりが、どんどん離れて行くことになったあれは、視覚に干渉されたせいだった。
光を利用し、視覚を誤魔化すことが、この妖貴には可能なのだ！
だとしたら、だ。
その力を振るえば、この空間にも同じことができるのではないだろうか⁉
自分たち三人しかいないように見えるこの空間は、実のところ全く違う姿を持っているのではないだろうか⁉

そう……これは考える価値がある推論だ。
紅蓮姫を振りながら、アーゼンターラはさらに考えを進めた。
蜜里は扉の記憶が四つあると言った。
螺旋杖を用いて自分たちが揮える力を、妖貴の女性が前もって把握していたとは思えない——自分が螺旋杖を取りだした時、彼女は確かに本気で力を振るった。螺旋杖を砕いたあの力は、容赦を知らないものだった。
彼女は螺旋杖の存在を知らなかった。
だったら、それを用いた時を考慮して囮の扉の仕掛けを用意していたはずはない。
蜜里がそう感じたのなら、本当に扉の記憶は四つ残されているのだ！
一度だけ開く扉——一度開けば用済みとなり消える扉。
その言葉に惑わされたが、実は真実だったのかもしれない。その声に宿る真実を感じ取ったからこそ、自分はこの場に留まることを選んだのかもしれない。
だが、その後に連ねられた言葉の真偽はわからないのだ。
いつか、どこかで聞いたことを思い出した。
信憑性のある嘘のつき方といった内容だったと記憶している。
嘘を相手に信じさせたいのであれば、要所要所に真実を織り交ぜるのが肝要だ。

人間は本当だとわかる情報と一緒にもたらされたものは、同じように本当だと信じるクセがあるから、と……言っていたのは年配の捕縛師だった。

依頼を終えて依頼主に報告する際、相手に都合の悪い事実があった場合、うまく誤魔化すために小さな嘘を混ぜるに当たっての秘訣だと。

この妖貴はそれと同じことをしたのではないだろうか。

虚実織り交ぜて話すことで、彼女は自分たちにすっかりこの状況を信じこませてしまった。

仲間四人は閉じられてしまった扉の向こうにしかいない。

取り戻そうにも扉の記憶は四つもある。どれが正しい扉なのか、判断できない……選べない。

これもまた、妖貴の誘導の一部ではなかったろうか。

一度きり開かれる扉——という言葉に、自分も蜜里も惑わされたのではないか。

それが真実だとしても、女性はそれがひとつきりだなどとは一度も口にはしていないのだ——ならば、蜜里が四つの扉の記憶を見つけたことに、おかしなところは何もない。

一度きりしか開かない扉が、四つあったところで、矛盾はないのだ。

そして、その意味するところは——。

これもまた、罠かもしれないとは思った。奸智に長けた妖貴は、恐らく無駄に思えるほどの仕掛けを用意している。

だが――。
試すだけの価値はある。
そう心を決め、アーゼンターラは声を上げた。
「蜜里！」
「なに、ターラ⁉」
「対象変更！　扉はいいから、この空間にたぶん張り巡らされてるだろう光糸を搦め捕って！」
「わかったわ！」
蜜里の反応は速かった。
新たな螺旋杖を取り出すなり、その螺旋の渦に空間を埋め尽くさんばかりの光糸を搦め捕っていく。
そうして、妖貴によるまやかしの空間が、真実の姿を現した時――。
「ターラ！」
蜜里が悲鳴を上げた。
アーゼンターラ自身、さすがにその瞬間は驚きと恐怖で声をなくした。
なぜなら――妖貴による光糸の幻術が解かれたその瞬間の現実といえば……仲間である破妖

剣士オルグァンが、斧の形態をした大振りの破妖刀『氷結漸』を、今まさにアーゼンターラの脳天に振り下ろそうとするその寸前だったのである！

これが振り下ろされたら、自分は確実に死ぬ――。

そう思った直後のことだ。破妖剣士にとって掛け替えのない相棒であるはずの破妖刀――氷結漸がオルグァンの手からすっぽ抜けて宙を舞ったのは。

そして、さらにその次の刹那。

アーゼンターラはがっしりした太い腕に抱きしめられていた。

「ターラ！　ターラ！　お前なんだな！　本当にお前なんだな！」

息もつけないほどの力で抱きしめられる。

正直、強すぎる力は勘弁してとは思ったけれど。

それでも、オルグァンのその態度は、アーゼンターラにとって嬉しいものだった。

もちろん、スラヴィエーラやマイダードのそれもだ。

この人たちと、一緒に行きたい。

心から、アーゼンターラはそう思った。

第二十八章　成就を待つ者

1

虚空に浮かぶ真球の空間――第六の妖主の居城は、常ならぬ喧噪に見舞われていた。

いや、実際の音声が空間を乱したわけではない。

城全体を包む空気が、ざわざわと落ち着かなかったのだ――城の主である少女の動揺が、この場全体に広がったためである。

少しは落ち着いたようだが、やはり完全にいつも通りとはいかない城内で、ひとりだけ妙に楽しげな男がいた。

「……それで、緋色の小鳥は大事なかったのか？」

数日ぶりに部屋から出て来た白焔の妖主が、その男に声をかけたのは、そうでもしなければ男がいつまでも身に纏う空気を変えそうになかったからだ。

悦に入っていると言えばいいのか、何かを噛みしめているようなと言おうか――はっきり言って気色が悪い。

この男がこんな楽しげな様子を見せる時、ろくなことを考えていないのは過去立証済みなので、さっさと意識を切り替えさせたいと思ったのである。

対する男は白煉の真意に気づいているのかいないのか――上機嫌に頷いた。

「負担の元凶が出ていったからな、少し休めば取りあえずは回復するだろうよ」

巨鳥の雛のためにも、そう願うよ。

そう言って、また男が楽しげに笑うのを見て、白煉は息をついた。

駄目だ、これは。

そうそうのことでは気分の切り替えはかないそうにない――男にまるでその気がないのだ。

何があったか知らないが、外で相当楽しいものでも見つけたらしい。

「聞きたくはないが、そんな物騒な気配をこれ以上まき散らされては不愉快だから聞いてやろう。外で何があったのじゃ？」

この言葉に、男の表情が初めて変わった。

意外なことを聞いたとでも言わんばかりの顔になったのだ。

「物騒？　おれが？」

「気づいておらなんだのか。狙いの獲物に飛びかかる寸前の獣のようじゃぞ。自分が狙われているわけでもないのに、ぞくぞくしてたまらぬ」

以前、こんな様子を男が見せた時は、確か一国を一夜にして滅ぼす計画を立てていたと記憶している。

世界の安定が揺らぐほどの大きな熱量の変化に、自分でも何が起こるかわからないと感じたものだ。

以降、そこまでの熱量が絡むような娯楽は慎むよう、王蜜の妖主が自ら自制を促したと聞いた。

雛の君の計画が着々と進展しているこの時期に、まさか馬鹿な真似はすまいとは思うが、ことこの男に関して良識は望みがたいだけに気になった。

「何があった」

再度問いかけると、男は意味深長に目を伏せた。

「別に……」

これは口にする気はないということか。

ならば、無駄なことに労力を費やすのも馬鹿らしい。白煉はさっさと話題を切り上げることにした。

「言いたくなくば言わずと結構。ただ、先にも言ったとおり、そんな気配をまき散らされては迷惑だ。自室に戻ってひとりでいくらでも思い出し笑いだろうがなんだろうが満喫すればよか

ろう」

これで駄目なら、腹立たしいが自分が部屋に戻るしかない。

そう思った彼女に気づいたのか、真紅の男は肩を竦めた。

「大したことじゃない。寝ぼけた虎の子供を蹴飛ばして起こしてきただけだ」

抽象的な言葉だったが、男が誰かに相手の嫌がる真似をしてきたことだけは確からしい。

他人が嫌がることを嬉々として成す男の性格だけは、白煉には理解できない。他人の思惑など自分はいっさい気にしないだけだが、この男ときたら敵を作るのが趣味としか思えない。

相手が誰かは知らぬし、気遣ってやるつもりもないが、ここまで男に楽しそうな顔をさせるということは、問題の人物は最低最悪の気分を味わわされたことだろう。

同情する気はないが、同情したくはあった。

小さく息をついた白煉に、もしかしたら誰かに聞かせたかったのか――だとしたら、自分はまんまと男の策にはまったことになる――嬉しげに言葉を続けた。

「いや、もう子供じゃないな……本人はまだ気づいてないが、あれはとっくに成獣だ。なのにいつまでもそのことに気づこうとしない。可愛い子虎とじゃれあうのも悪くはないが、いいかげん本気になってもらいたくてな」

男の執着が相当深いことが窺える言葉に、白煉は「もういい」と吐き出した。

こんな男にこんな執着を向けられた相手の末路を思えば、そうとしか言えなかった。

それにしても、と白煉はふと気づくことがあって内心首を傾げた。

新しい玩具を見つけたというには、時間をかけているような口ぶりが気になる。この男が最近執着した娘は、父親である王蜜の妖主の意向で封じられているはずだ。

では、別の玩具も同時に手に入れていたわけか——複数の玩具を絶えず用意するというのはこの男らしくない気がしたが、他には考えられない。

白煉はそれ以上男のことを考えるのが馬鹿らしくなり、それ以上の思考を放棄した——匙を投げたとも言う。

「そうか。子虎と侮った挙句に逆にのど笛を食いちぎられないよう気をつけるのじゃな」

それきり会話を切り上げ、部屋に戻るつもりだった白煉だが、先に動いたのは男のほうだった。

「なんじゃ、戻るのか」

それならさっさと戻ればよいものを——。

そんな白煉の思いは顔に出ていたのだろう、男は相変わらず上機嫌のまま、「いいや」と答えた。

「気分がいいから、ひとつ雛鳥の不安材料を消してきてやろうと思ってな」

これもまた、ろくでもないことに決まっている——本当に、上機嫌の柘榴の妖主など迷惑以外の何ものでもない。

「そうか」

さっさと行ってしまえとばかりに投げやりな声で送りだそうとしたときだ。

不意に男の声のトーンが変わった。

「白煉。お前、雛鳥が藍絲に何を望んでいるのか知っているか？」

斬りこんでくる刃のような声だった。

その声の奥に、別の問いが透けて見えたような気がして、白煉は息を呑みそうになった。

知っていて、放っておくのか？

男が何のつもりで問いかけてきたのかはわからない。だが、返すべき答えはとうに自分の中に在る。

白煉は男を振り返りながらきっぱりと答えた。

「妾は雛の君に敗れた折に、従うと誓ったのじゃ」

男はそれ以上、言葉を重ねてはこなかった。

「そうか」

とだけ答え、そのまま部屋を出て行った。

その背中が見えなくなるのを待って、白煉は大きく息をついた。
男を恐ろしいと感じたのは初めてのことだったのだ――。

※

その日の午後は、マンスラムにとって慌ただしい時間となった。
「いったい、何を企んでおいでなのです!?」
単身彼女の住まいを訪ねてきた現在の城長が、開口一番怒鳴りつけるように問いかけてきたのがその午後の始まりだった。
彼がそう言いたい気持ちはわからないでもない。
未だ浮城の護り手たちによる監視が緩まぬ状況下――このあたりで大騒ぎが起こったのは昨日のことだ。
思い出しても頭痛がする。
外れとはいえ、浮城の結界がまだ効果を及ぼすこの場所に、あろうことかなかろうことか、強大な魔性が集まってくれたのだ。
謹慎中のラエスリールが浮城を無断で抜け出した際、紅蓮姫をわざわざ届けるような真似を

したことで、マンスラムは浮城にとって要注意人物として常に監視される立場になった。そんな彼女の住む近辺で起こった昨日の騒ぎに、浮城の護り手たちが気づかぬはずがないのだ。

だが――城長であるアーヴィヌスには悪いが、答える材料をマンスラムは持たない。

集った魔性は上位者ばかり。

浮城を護る結界など彼らには無意味だと突きつけられるような出来事だった。

にも拘わらず、ここに住んでいるマンスラムには一切の説明もなく、嵐のように彼らは突然引き上げたのだ。

きしり、と胸が痛んだ。

招かざる客たちの中、唯一魔性ではない、懐かしい存在は、誰よりも先にこの場を立ち去る決断をした。

黒髪に美しい緑の双眸を持つ、記憶のままの親友は、自分たちの必死の呼びかけにも、一度振り返るだけで跳び去ってしまったのだ。

「企むだなんて、人聞きの悪い……。あの騒ぎにはこちらも被害を受けたのよ」

何しろ突然上級魔性が押し寄せて、うちで預かっていた養い児がその騒ぎに巻き込まれてしまったのですからね。

そう、あれ以来、ここから住人がひとり消えた。

なりこそ大きいが、実際に生きた期間は二年にも満たない子供の姿はもはやここにはない。
濫花。
半人半妖の、なにがしかの目的で生み出された青年は、昨日の騒ぎで失われてしまった――
姿が消えたというのではない。
彼ではない別の存在にその肉体を奪われたのだ。
それを目の当たりにした時の衝撃を、果たしてアーヴィヌスは理解してくれるだろうか。
だが、マンスラムの後を継ぎ、浮城の城長となった男はにべもなく言いきった。
「あの半人半妖の子供擬きが消えたことは、護り手たちの報告で知っています。ですが、わたしが聞きたいのはそういうことではない。薄々感じてはおりましたが、あなたはすでに守るべき存在を見失っていらっしゃる！　半人半妖など、いつこちらを裏切るかもしれない存在を二度にもわたって保護するところにそれが現れている！　これ以上、真の眷属を裏切る前に、どうか心を改めていただきたい。昨日、ここで何が起こったのですか⁉」
浮城を預かる身として、是非ともお聞かせ願いたい。
アーヴィヌスの瞳は真剣そのもので、彼が彼の言うところの『真の眷属』……すなわち人間のことを心から案じているのはマンスラムにも痛いほどにわかった。
人間は確かに魔性よりずっと無力で脆弱な存在だ。

そうである以上、浮城に集う者たちが、全力でもって守らなければならない。疑わしい因子の介入はその目的に則するものではない。だから排除すべきなのだ――と。

彼は以前からずっとそう主張してきた。

魔性の脅威から人間を守る浮城の長として、それは決して間違った考えではないだろう。過去にはいくらでも彼と同じ考えを持つ城長は存在した。

だが――。

アーヴィヌス。

あなたは自分で自分の目を塞いでいることに、まだ気がついていないのね。

マンスラムは胸中そっと息を洩らした。

そして、すでに護り手からの報告で、彼が知っているであろう事実を認める言葉を口にした――もともと隠し通そうとは思っていなかったけれど。

「柘榴の妖主と、見たことも聞いたこともないけれど、妖主だと聞いてもおかしくはないと思える少女、あとはうちの養い児の体を奪った魔性と、調子が悪そうだと一目でわかる娘姿の魔性……あとはいかにも手強そうな妖貴がふたり……喧々囂々とやり合っていたわね」

これがわたくしの知る全てよ。

言ったところで、アーヴィヌスが完全に信じるとは思わない。

彼は気づいていないが、人知を超える異能全てに畏れと嫌悪と恐怖と不信を抱いている。
自分に対してかろうじてでも敬意を払うのは、結局のところ彼の規定する人間の持ちうる異能の範疇に、自分のそれが収まるからだ。
そうでない限りに於いて、彼は不信を強めるばかりだ。
そう……たとえば自分の親友に関してなど。
不世出の魅縛師、稀代の魅縛師。
そう呼ばれる自分の親友に、彼が不信の目を向けていたことは知っている。
理由は彼女が、彼の価値観とは違う言動を常にとっていたことだ。
さらに言及するなら、親友は時に人間より魔性に心を傾けていると感じさせる時もあった。
だから、アーヴィヌスの不安もわからないではない。
けれど。
そう、けれど、とマンスラムは言いたい。
断固とした態度で魔を断つ決断力を見せるチェリクは、同時に多数の護り手を獲得した。
人間を守るために——彼女は確かにそれを成したのだ。
だが、今のアーヴィヌスにそれを告げたところで意味はない。変わるつもりがなければ、人間は変わらない。

彼にそのつもりはないのだ。
いや、それ以上に――。
「アーヴィヌス……あなた、最近ちゃんと眠れているの？」
「何ですか、突然」
思いがけないマンスラムの問いに、アーヴィヌスが怪訝そうに問い返す。
「人間不眠状態が続くと精神的に不安定になるものよ。忙しいのはわかるけれど、せめて最低限の睡眠は確保しないと……」
気遣いの言葉は、しかし彼の怒りを爆発させる結果にしかならなかった。
「誰のせいだと思ってるんですか！　あなたが馬鹿な真似をなさらなければ、わたしが心労で夜も眠れぬ思いを味わうことはなかったんです！　それなのに、また騒ぎを起こして……！　わたしのことを心配してくれるつもりがあるのなら、二度と妙なことに首を突っ込まないでいただきたい！　今度同じようなことがあれば、遠慮なく拘束させていただきますから、そのおつもりで！　わたしが言いたいのはそれだけです！」
それだけ言うと、アーヴィヌスは乱暴に席を立ち、足音も荒く出て行ってしまった。
「……なに、あれ？　最後のほう、完全に子供の癇癪になっていなかった？」
それまでマンスラムの内で黙っていた旺李が、半身だけ姿を現して呆れたようにそう言うと、

元城長の女性はゆっくりと頭を振った。

「城長は激務なのよ。おまけにここ数年の状況では夜も眠れないのもわからないではないわ。わたしだって、チェリクがいなくなったせいで城長の任を押しつけられて数年は、何度も癇癪を起こしそうになったのを、あなたも知っているじゃない」

「だけど、あなたはひとに当たったりはしなかったわ」

魔性である旺李は、好ましいと想う相手とそうでない人間に対しての反応をはっきりと分けるところがある。

チェリクの護り手だった頃から、彼女はアーヴィヌスを気に入っていなかったようなので、これは仕方のない反応なのかもしれない。

「……確かに、誰もいない場所でしか鬱憤を晴らそうとは思わなかったけれどね。あの子は昔から神経の細いところがあったから……相当煮詰まっていたんでしょう」

しかし、やはり旺李は同意しかねる様子だ。

「昔から、あなたはあいつに甘いと思うわ」

「仕方ないじゃない。チェリクに苛められて凹んだ子たちを慰める役目はわたしに回ってきてたんだから」

苦笑しながらそう答えると、旺李は憤然と反論してきた。

「リークは誰も苛めたりはしないわ！　魔性を相手に命を落としたりしないよう、寸暇を惜しんで鍛えてやってたんじゃない！」

「戦力育成も兼ねてね。彼女の過酷な愛の鞭に素直に感謝するには、セスランぐらい神経が太くなければ無理よ。わたしが思い切り甘くならなければ、鍛えられる前に心が折られていたと思うわ」

当時のことを思い出しながらそう告げた時だ。

空中から、くすりと笑う気配が伝わってきた。

それと同時に、白い何かがふわりと落ちて来る。

それだけだ。気配の主が現れる様子はない。

「……せめて一言、お届け物ですぐらいは欲しかったわね」

詰めていた息を思い切り吐いて、マンスラムは届けられたそれに手を伸ばした。

真っ白い封筒だ。

中には青い小花の押し花が貼り付けられたカードが一枚入っているきりだった。

「勿忘草……のカードをわざわざ逆さに入れてあるということは、意味も逆さにしろと言いたいのかしら」

な忘れそ――忘れないでという意味の名を持つ花。

花言葉はそのまま「わたしを忘れないでください」――その逆の意味となれば。

わたしを忘れてください――。

カードの送り主が誰か、考えるまでもなかった。

「勝手なことを……」

呟くマンスラムの声は、少しだけ震えていた――。

2

アーゼンターラたちのために用意されていた扉はそれぞれひとつ。
それらを別々にくぐった四人は、待っていた妖貴から同じことを告げられたのだ。
すなわち、四人揃ってくぐるべき扉はすでに閉ざされた、他の三人は永遠に扉の向こうの空間を彷徨うばかりだ、と。
そして、アーゼンターラ以外の者に告げられたのは、『扉を開きたければ、わたしを跪かせるのだね』というものだったらしい。
彼女同様、ひとりだけ先に進もうとは誰も思わず、結果として妖貴の思うつぼにはまってしまったのだ。
光糸を操る妖貴は、四人それぞれに自らの姿を重ね、彼らが互いに気づかないようにした上でそれぞれを戦わせていたのだ。
「いやー、ターラちゃんが気づいてくれなかったら、おれたち同士討ちまっしぐらだったよな

あ」

オルグァンの手からすっぽ抜けた氷結漸を拾い上げながら、心底ほっとしたような声を上げたのはマイダードである。

彼の腕にも浅くはない傷が走っている。

オルグァンの氷結漸か、スラヴィエーラの夢晶結によるものだろう。

それは他のふたりにしても同じだった。

互いを敵だと信じて武器を振るい合ったのだ、この程度ですんだのは運がよかったとしか言いようがない。

「本当に、ターラには感謝だわ。気づいてくれたこともそうだけど、螺旋杖を用意してくれてなかったら、わたしたちだけじゃ、あれは切り抜けられなかったもの」

夢晶結を鞘に戻しながら、スラヴィエーラががりがりと頭を掻いた。

「情けない……年長者が揃って騙されて踊らされて！　魔性が嘘つきなことぐらいわかっていたのに！　特にオルグァン！　あなたは心底ターラに感謝しなさい！　もう少しで仲間殺しの汚名を着せられるところだったんですからね！」

「わかってる」

ようやくアーゼンターラの体から腕を外したオルグァンは、苦り切った顔でそう応じた。

もしかしたら彼が一番衝撃を受けているかもしれない——そう思うと、アーゼンターラは口を開かずにはいられなかった。

「仕方ないわよ。一番みんなが引っかかりそうなことを言われたんだもの。あたしだって、同じこと言われたら、紅蓮姫でみんなに斬りかかってたと思う」

そう、自分が螺旋杖を使うことを思いつかなければ、妖貴はきっと同じことを言っていたに違いない。

そして疑うこともなく、まやかしの妖貴に斬りかかっていく自分の姿が目に見えるようだ。

螺旋杖を用意していなければ、間違いなくそうなっていた。

そして、そばに蜜里がいてくれなければ、思いついたところで実際にこの空間に張り巡らされた光糸を無効化することはできなかったのだ。

「だから、感謝なら蜜里にして。あたしは突っ立ってただけみたいなものなんだし」

そう言うと、氷結漸をオルグァンに手渡したマイダードが「違うだろ」と言った。

「ターラが万一に備えて螺旋杖を用意して、蜜里ちゃんを信用してそれを託して、尚且つ必死にいろいろなことを考えてくれたから、こうして四人再会できたってことだろ。謙遜しすぎはかえって厭味なこともある。ここは黙って感謝されてなって」

「そうだよ。ちょっと前まで猪突猛進しか知らなかった娘がよくぞここまで成長したって、心

から感心してるんだから」

スラヴィエーラがマイダードに同調しながら、アーゼンターラの頭をくしゃくしゃにかき回した。

「ちょ、スラヴィ！　猪突猛進って、それ全然褒め言葉じゃないし！」

「当たり前だろ、褒めちゃいないんだから。まさか否定する気かい？」

ぐ、と言葉に詰まったアーゼンターラである。

確かに指摘されるまでもなく、ここ一年の自分を振り返れば『猪突猛進』と言われても仕方ない自覚はある。

「……できないけど」

でも、猪って猪扱いって……。

ぶつぶつ文句を洩らしてしまうのは、アーゼンターラが実際に突進する猪の姿を故郷で目にしたことがあるせいだった。

あれと自分を一緒にされるのは、やはり釈然としないものがある。

「蜜里も、本当にありがとね、助かったわ。相棒の封魔具使えるなんて、一心同体みたいで格好いいね」

さすがにわたしのは、未羽に使わせるわけにはいかないけど――。

告げられた言葉に、蜜里が嬉しそうに笑った。
「こちらこそ、ありがとう！　こんな嬉しい言葉をもらったのは初めてよ！」
しかし、和やかな空気は突然断ち切られた。
「……忌々しい」
低い怒りに満ちた声が、その場を凍りつかせたのだ。
はっとして、声のほうを振り返ったアーゼンターラは、漆黒の女性が自分を睨みつけているのを見た。
激しい憎悪がその漆黒の中で揺らめいている。
殺意だけで人間の命など摘み取れてしまうのではないのか——そう思わせるほどに鋭く冷たい気が女性から放たれ、アーゼンターラは全身を切りつけられるかのような痛みを覚えた。
「取るに足らぬ小娘と思ったら、とんだ食わせ者だ。あんな小道具を隠し持っているとは……わたしとしたことが油断が過ぎたよ」
その白い指がすい、と動いたかと思った瞬間、アーゼンターラの上着の胸元が切り裂かれ、用意して来た螺旋杖が宙を舞った。
否、不可視の糸に搦め捕られたのだ！
「返して！」

アーゼンターラは手を伸ばし、螺旋杖を取り返そうとしたが、それを見越したように糸はさらに高く螺旋杖を運び、より高くに持ち上げた。

「これは、いけない」

妖貴が螺旋杖の一本を手に取り、螺旋に刻まれた溝を優美な指でなぞる。

「何をも巻き取る力が刻みこまれている。こんな厄介な小道具を持たせたまま、お前たちを璃岩城に入れるわけにはいかない……いや」

そこで女性は少しだけ考え込むように、頬に手を当てた。

「そもそも入れることが間違っているのか……？」

不穏な気配を漂わせ始めた妖貴に、アーゼンターラはぎくりとした。

魔性は嘘つきだとスラヴィエーラは言った。確かに目前の妖貴も自分たちに嘘をついた——けれど、だ！

彼女はこれ以上の関与は許されていないと言ってはいなかっただろうか？

人間などの忠誠心など比較にならぬほどの想いを主にささげているのだと、忠誠は誇りだと……だからこそ、主の命は絶対なのだと。

あれは、あの言葉だけは偽りなどかけらも感じられない真摯なものだった。

なのに、今彼女はその言を翻そうとしているのか⁉

「なにを……」
先に何を続けるのかもわからぬまま、アーゼンターラは思わず声を上げた。
「何をしようと……」
いうの？
この問いに、妖貴は再度彼女に目を向けてきた。
先ほどまでとは全然違う、静かな――穏やかとさえ呼べる眼差しだった。
奥に煌めく決意の色が、アーゼンターラを不安に駆り立てる――こんなことなら、再会を喜び合うのはあとに回して、蜜里に傷を治してもらうべきだったかと思ったが、今さら遅い。
どうする。
もちろん、相手が戦いを仕掛けてきたら、自分たちに選択肢はない。
逃げようにもここに来た際用いた扉はすでに閉ざされている。残る扉は彼女の背後にあるというひとつきりだ。
そして、その扉が繋がる先は璃岩城――紫紺の妖主が待ち受けている。
駄目だ。避けようがない。
きり、と唇を噛みしめ、アーゼンターラは紅蓮姫を握る手に力をこめた。
仕方ない。

他に道がないというのなら、どれほど絶望的な状況であろうと前に進むしかない。この妖貴を倒した上で、紫紺の妖主と対決するなど、想像を絶する難事だが、ここまで来たのだ。

「みんな、気をつけて！」

来るわ！

アーゼンターラの叫びに、返ってきたのは一言ずつの肯定の言葉だった。

「はいな」

「わかった」

「りょーかい」

妖貴が口を開いた時から、彼らはこうなることを覚悟していたのだろう。

ああ、やっぱりあたしはまだまだだ。

けれど、今度はひとりきりではない。皆がいる。仲間が。

「紅蓮姫。予定とは違うけど、どうやら極上の前菜をご馳走してあげられそうよ」

真紅の刀身が歓喜に震える。

全く、この食欲魔神の破妖刀ときたら！

どんな時でも食欲優先というのはどうなのか——自省して少しは改めて欲しいと思ってしまう。

が、強大な魔性を相手に戦う場において、彼女が心強い相棒であることも確かな事実だ。
「さ、行こうか」
唇を舌で湿らせ、アーゼンターラが告げたまさにその刹那――。
耳にするだけで、心まで痺れてしまいそうな、そんな男性の声がその場に割り込み、空間全体を支配した。

※

『津々螺』
呼ばれたのは魔性の名――漆黒の女性がびくりと身を震わせた。
それだけで、それが彼女の名であり、呼びかけた相手が誰であるのかアーゼンターラにはわかった。
わかって、しまった。
声の響きは穏やかなものだ――だが、宿る力は穏やかどころの話ではない。
先ほど、殺意を露にした妖貴――津々螺の視線を受けた時、全身を切り裂かれるような痛みを覚えたが、これは耳にしただけで、戦意を殺がれ、そのまま心地よさに酔いしれたくなる力

に溢れている。

「我が君⁉」

津々螺が狼狽も露に声の主に呼びかける。

だが、紫紺の妖主はそれには答えず、諭すような言葉を寄越した。

『それ以上、君が客人を歓待する必要はない。彼らはわたしの客なのだからね』

「わ、我が君……」

あの強大な妖貴が、声だけ送ってくる相手に跪かんばかりに動揺していた。

『津々螺、君には感謝している。よくぞ、彼らをそこまで案内し、さらには力を磨いてくれた。彼らはわたしの客に迎えるに恥ずかしくない力を持つことが証明された。そのことには、本当に感謝しているよ』

柔らかい口調、穏やかな言葉選び——だが、直訳すれば、それは鍛えてくれたおかげで自分が相手してやる程度には育ったということだ。

馬鹿にするにも程がある。

だが、紫紺の妖主が津々螺に語りかけている間、アーゼンターラを含めチームの誰ひとりとして口を挟むことはできなかった。

誰が相手でも、平気で茶々を入れる神経の持ち主だと思っていたマイダードですら、この時

は沈黙を守っていた。

さらに紫紺の妖主の言葉は続いた。

『だが、これ以上君がかかわる必要はない。重ねて言うが、彼らはわたしの客なのだ。わたしが自ら迎えるのが筋というものだろう？』

その言葉に、言外の意味があったのかどうか、アーゼンターラたちにはわからない。

だが、これを聞いて津々螺はがくりと肩を落とした。

「仰せのままに、我が君」

そう答えると、先ほどまでの戦意が嘘のように、彼女はその場から消え失せた。

まさに煙か何かのように、完全にその気配ごと消えたのだ。

戦闘開始寸前で放り出された格好になったアーゼンターラたちが呆然とする中、その場の壁面に変化が生じた。

一画だけが切り取られたかのように、まるで違う場所の映像を映し出したのである。

それは――。

壁面を夥しい数の人形で埋め尽くされたどこかの広間のような場所で、単身佇む男性の姿だった。

その髪は紫紺、その双眸もまた紫紺。

色彩そのものが異様だが、真に異様なのはその全身像が他者に与える圧倒的な美しさだった。
顔が美しい人間ならいる。
肉体が美しい人間もいる。
両方ともに美しい人間だとて珍しいが、いる。
だが、そこに映った男性の姿は、とてもそんな言葉で言い表せるものではなかった。
敢えて言葉を選ぶなら、それはただ一語のみだ。
絶美。
人間の想像を絶する美を湛えた男性が、そこにはいたのだ。
『わたしの配下が随分無茶をしかけたようだね』
淡々とした声が、労るような言葉を告げるだけで、それだけで。
アーゼンターラは「とんでもありません」と言いたくなった。
真の力というものは、心を無理矢理支配するものではないのだと思い知らされる。
そのひとの存在そのものに感謝し、そのひとと相まみえたことそのことに感謝し——そのひとに関する全てに感謝する。
これは魔性の王なのだ、これは人間の大いなる敵なのだ——と、どんなに心に言い聞かせても、勝手に心が慕ってしまう。

自分の知らないどこかの部分が、無条件にその存在を感謝とともに受け入れてしまうのだ。
そう……彼らの存在がなければ、自分たちがいる世界そのものが存在しない泡沫に過ぎないとでもいうように。
『それを詫びる意味で、君たちには充分な休息と治療の時間を与えよう。護り手の力に差はあろうから、充分な時間をね』
わたしとしても、後に配下に力を殺がせたなどと言われたくはないからね。
支配者の持つ余裕と傲慢を、この時アーゼンターラは苛立たしく感じることさえできなかった。
そう、何もかもが圧倒的で。
このひとと相まみえ、戦うのだと——思うことさえ心に多大な負担をかけるようで。
負けてはならない理由が自分にはあるのに。
どうしても負けられない理由があるのに。
勝手に心は彼に従いたくて仕方ないと訴えてくる。
駄目なのに。
そんなことは決して許されないし、自分でも許せないのに。
これが、世界に五人しかいないという魔性の王。

喜んで従いそうになる心を必死に叱咤するアーゼンターラたちの心境を知ってか知らずか、紫紺の妖主は穏やかなままの笑顔で最後の言葉を口にした。

『準備が整ったら、そこに見える扉をくぐればいい。まやかしでもなんでもなく、わたし自身が待っていると約束しよう。……もっとも、カーヴィア十万の民より自分の命を惜しむなら、何とかそこから戻る道を探すことを勧めるがね』

意地の悪さは魔性に共通した性なのだろうか。

最後の最後で、こちらの逃げ道を塞ぐ切り札を口にするとは、質が悪いにもほどがある！

その怒りが、アーゼンターラを奮い立たせた。

もしもそこまで含めて紫紺の妖主の策の内であるというなら、これはもう腹が立つとかいう次元ではなく脱帽するしかないのだが、この時の彼女にはそこまで考える精神的余裕はなかった。

だから、彼女は拳を震わせて宣言したのだ。

「誰が……誰が尻尾を巻いて逃げ帰る臆病者ですってぇ!?　冗談じゃないわ！」

空間そのものを支配して、紫紺の妖主が笑った。

言葉はなかった。

だが、その笑い声が「では、期待して待っていよう」と聞こえたのはアーゼンターラだけで

はなかったと、後に知った。
アーゼンターラは先ほどまで津々螺が立ち塞がっていた場所を睨むように凝視した。
そして、見つけた。
見据える先――津々螺が守っていた扉が在った。

3

津々螺は悔やんでいた。

主の命を破りかけたことを、ではなく、主の気迫に押されて伝えるべきことを主である紫紺の妖主に伝えきれなかったことを、だ。

一部始終を主が見ていたことは、あの瞬間でも感じ取れたことだ。

自分の仕掛けた罠も、そこから脱した娘の智恵と小細工も、主であるひとはしっかりと見て取ったはずだった。

そうとわかっていても、それでも悔いを残すのは、自身が感じた主の客人——アーゼンターラに対する感想を、結局直に伝え損ねたせいだ。

取るに足らぬ小娘だと思った。

過去の行動からも、そうとしか思えなかった。

強大な敵を感知すれば、自分がと突っ走り、策もなく飛び込んでは痛い目にばかり遭ってい

る。

運と護り手としてついている眷属の娘がいなければ、とうに潰えていた命だ。

よくもったものだとさえ思っていた命だ。

だから、当然価値など最初から見いだすつもりもなく、主が相対するだけの資格を持っているのか否か、そこまで果たして成長しているのかどうか――最低限のことを測るつもりで彼らに罠を仕掛けた。

一度だけ開かれ、二度とは開かぬ扉の罠に、面白いほどに彼らは全員反応した。

人間の中にはそういう変わり種がいることを知っていた津々螺にとっても、全員が全員同じ選択をした時には驚きを隠すのに苦労したほどだった。

他の三人を見捨てれば、先の――目的地に辿り着ける。

この罠に対して、自分に甘い言い訳を許さず拒絶した人間が皆無というわけではない。だが、全員がそれを拒んだのは津々螺が知る上で初めてのことだった。

ならば、全員、その善意ゆえに殺し合えばいいと思った。

光糸を操れば、それは容易いことだった。

否、容易いことのはずだった。

なのに、その容易いはずの策を、あろうことか取るに足らぬと見て取った娘が破ったのだ。

返す返すも悔やまれるのは、あの娘と護り手を分断したままでいられなかったことだ。

螺旋杖は確かに厄介な小道具だが、使える人間がひとりきりなら、使わせない策はいくらでもあった。そう、蜜里と呼ばれていたあの幼い娘が、螺旋杖を使えると知っていれば、決して合流はさせなかった。

否。最初からあのふたりを合流させるつもりはなかったのだ。

カーヴィアの街で彼らを隔てた不可視の壁――あれだけは津々螺が直々に用意したものだった。いかに妖貴とはいえ、幼く経験も少ないあの娘に破られるはずがないのだ。

なのに、小娘の危機に蜜里が叫びを上げた時、尋常ならざる力が溢れ出し、自分が作った壁がかき消された。

あれは……蜜里自身の力ではなかった。

彼女の胸元から放たれた金色の光――力。

あれは、彼女とは全く違う気配を纏っていた。

「まさか、魔具……か？」

浮城の護り手がどうしてそんなものを持っているかはわからないが、そう考えれば得心がいく。

あれは恐らく強大な力を持つ魔性の力、もしくは命を封じて作られた魔具の放った輝きだっ

たのだ。

ならば、本当に警戒すべきは螺旋杖ではなく、その魔具ということにならないか。

その魔具を、先ほど蜜里は使わなかった――螺旋杖を扱うのに必死で、そんな機会がなかったのだ。それはつまり、魔具の存在を主は知らぬということだ。

「いけない」

それはいけない――危険なことだと津々螺の本能が訴える。

何としても、このことを主に告げなければならない。破妖剣士たちを足止めすることは最早不可能だが、彼らが主に辿り着く前に――。

そう思い、踵を返そうとした津々螺の耳に、主とは違う、だが同じほどに力に満ちた声が飛び込んできた。

「どこへ行く気だ？」

振り返れば、深紅の闇の化身がいた。

「柘榴の君……」

主君ではなくとも、相手は世界中の魔性を統べる王のひとりだ。

礼を尽くさねばならない。

よりにもよって、なぜこんな時に――。

内心の苛立ちを表に出さぬよう気をつけながら、津々螺はゆっくりと頭を垂れた。

「柘榴の君にはご機嫌麗しく――」

礼など気にしない男であることは知っている。

配下の礼さえ面倒だという理由で嫌がるような男なのだ。

だが、だからと言って自分が礼を忘れていいことにはならない。主の顔に泥を塗るような真似は断じてできないのだ。

「ああ、仰々しいのはいい。どうせ心なんざこもっちゃいないだろうからな」

そうさせない自分を棚に上げて――津々螺は他の妖主にはきちんと敬意を抱いているのだ――皮肉を言う男に、内心嘆息した。

「それでは、単刀直入に伺います。柘榴の君にはこの津々螺に何の御用がおありでしょうか？　失礼ながら、主に至急伝えたきことがございますゆえ、その後に伺うのでは遅うございますでしょうか？」

口にした瞬間、津々螺は言い方を間違えたことに気づいた。

強大な力を揮う魔王のひとりでありながら、この男は相手の嫌がることを嬉々としてやる悪癖があるのだ。

こんな言い方をしたら、今でなければならない用だと言い張るに違いない。

果たして、柘榴の妖主は彼女の予想通りの反応を見せた。
「悪いが、こちらも急ぎでね。どうしても今、つきあってもらいたい」
やはり……。
ため息を堪えるのは、常になく難しかった。
「さようですか」
嘆きとも非難ともつかぬ響きが声に混じるが、それを気にしてくれるような相手ではないこともわかっていた。
ここはもう、諦めて男につきあうしかない。
主には自分だけが使える方法で魔具のことを伝えるしかないだろう。
そんな算段を組んでいた津々螺は、男の行為に気づかなかった——妖貴の彼女にも気づけぬほどにさりげなく、自然に、男は力を揮ったのだ。
周囲の景色が一変する——今の今までいた場所から、男が津々螺ごと空間を移動したのだ。
なんという力であることか！
紫紺の妖主の影をも務める自分が、男の術を感知することさえできなかった。
「柘榴の君、ここはいったい……」
何なのですか？

思わず問いかけてしまうほど、そこは異様な空間だった。
天地ともが夜空を映したかのような様子だが、時間の流れが奇妙なのだ。流れているのか止まっているのかもわからない、奇怪で不安を誘う空間だった。
「確か、『時の迷宮』と呼んでたやつがいたな。昔作ったきり、忘れ去ってたんだが、数年前ひょんなことで思い出してな」
「時の迷宮……」
それなら、この不自然な時間のありようも納得できる、と津々螺は思った。
時を支配する魔王が手慰みに作ったのだろう。
「まあ、他の場所でもよかったんだが、ちょっと藍絲の野郎には聞かれたくない話をするんでな」
連れて来させてもらった――。
深紅の青年の言葉に、津々螺は驚きに目を瞠った。
紫紺の妖主の側近たる自分に、主に聞かせられない話を聞かせるとは、いったい何のつもりだというのか。到底頷けるものではなかった。
「そういうことであるのなら、失礼させていただきます。主に秘め事を抱え込む気など、皆目ございませんから」

言い捨て、その場を去ろうとした津々螺は、次の瞬間、今度こそ恐怖にも似た驚愕に襲われた。

跳べないのだ。

「おれが作った空間だって言ったろう？　ここじゃおれが望まない限り、誰も力を揮えやしないんだよ。面白がって過去を引っかき回す輩が出ないとも限らなかったんでな」

それはつまり、津々螺はここから自力で抜け出すことはできないということだ。

背筋に冷たいものが伝う。

「柘榴の君！　いったい何を考えておいでなのです？　いかに貴いお方とはいえ、このような真似をされる覚えは……っ！」

ない――とそう言いきる前に、男が動いた。

男の手が津々螺の腹部に伸びたと思った次の刹那――その手には、彼女の心臓のひとつが摑み取られていた。

痛みはない。

だが、津々螺を襲った衝撃はそれ以上に深刻なものだった。

「柘榴の君！」

己の心臓を取り戻そうと、必死に手を伸ばすが、それは男には届かない。

男はしげしげと津々螺の心臓を眺めると、「やはりな」と呟いた。
「柘榴の――」
津々螺は残された心臓ごと凍りつくような恐怖を覚えた。
「お前のことは以前から見知ってたけどな。ある時期を境に妙に藍絲の野郎に似通ったものに変わったから、怪しいと思っていたが……案の定か」
津々螺にとって、最も重要な心臓を握ったまま、男が得心顔で頷いた。
「お返しください！」
津々螺は必死に叫んだが、その声が男の心に届く様子はなかった。
「藍絲の命をひとつ与えられたというのなら、気配が酷似するのも道理だよな。影を務めるのも楽だったんじゃないのか？」
「紫紺の君が何をなさろうと、貴方には関わりなきことではございませんか！」
責める響きを、もう隠そうとは思わなかった。
「確かにおれには関係ないことだ。だが、そのあたりのことを非常に気にする雛鳥がいるんだよ。あいつの命をこんなところに野放しにしてはおけないというやつがな」
雛鳥――それはいったい何を指す隠語なのか、津々螺にはわからない。
だから、これは柘榴の妖主の戯言に違いないと判断した。

「悪ふざけもほどほどになさってください！　このような真似、主に知れても構わぬと仰せですか？」

「今は困るから、お前をここに連れてきたんじゃないか」

むき出しの心臓の手触りを確かめるかのように、男の指が締めつけてくる。

「あいつも保険なら保険で、雛鳥に知られないよう隠しておけばいいものを……甘い顔して干渉を許したりするから、雛鳥に見つかるんだ。雛鳥はあいつの命が散らばっていることを望んじゃいない……そんなことになったら、事の成就はならないからな。本体がくたばっても、お前の体に命が残ってるなら、あいつは結局生き延びる……お前の体に移ってな。それじゃ、雛鳥は困るんだとよ」

てっきり男の戯言だと思っていたが、どうやら雛鳥と呼ぶ存在の意向で彼は動いているらしい。

それはわかったが、その内容はとても認められるものではない。

男の言葉が真実なら、雛鳥と彼が呼ぶ存在は、至高の主である紫紺の妖主の死を望んでいるのだから！

津々螺は恐怖が全身を支配するのを感じた。

どうすればいい。力も揮えぬこの空間で、どうすれば主の命が宿る心臓を取り戻すことがで

きる——もしかしたら、主を滅びから救うことができるかもしれない命綱を！

「お返しください、柘榴の君！　ご命令なら、時が来るまで、この空間で謹慎いたします……世界から切り離されたこの空間にある限り、力を揮えぬのですから、我が君のお命を預かったままでも支障はないと存じます！」

必死の懇願も提案も、男の心を動かすことはできなかった。

「馬鹿を言うな。五要の存亡がかかった場面で、こんな空間が目くらましになぞなるもんか。悪いが、やはりこれは処分させてもらう」

悪いと言いながら、その目は笑みを湛えている。

「柘榴の君！」

叫ぶ津々螺を尻目に、男の指が取りだした心臓を締めつけ——そうして、完全に握り潰す！

津々螺は声にならぬ悲鳴を上げながら、その場に崩れ落ちた。

「本当に、悪いとは思ってるんだぜ？　こんなことなら、お前に事情を教えてやることはなかたな、と」

砕かれた命の名残を、指で振り落としながら、無情な男は傲慢に告げた。

「……まあ、今戻して藍絲に注進に走られても困る。しばらくここで休んでるんだな」

事が終わったら迎えに来てやるよ。

茫然自失の体の津々螺を残して、男の姿がかき消える。
それでも、津々螺は恨み言ひとつ、口にすることはできなかった。
大きすぎる喪失と、想像もできぬ破滅の予感に、彼女の心は凍りついていた――。

第二十九章　ヒトガタの城

1

蜜里や未羽たちに傷を治療してもらうとすぐに、アーゼンターラたちは紫紺の妖主が示した扉をくぐった。

充分な休息を、と相手は言ったが、とてもそんな気にはなれなかったのだ。

その理由のひとつは、オルグァンの言葉にあった。

オルグァンは、カーヴィアの街で別れた後、飛び込んだ先の家で住人の現在の状態を確認しただけひとりのメンバーだった。

アーゼンターラもスラヴィエーラもマイダードも、住人と接触する前に妖鬼と対面することとなり、その時間が取れなかったのだ。

「かなり脈が弱っていた。あれでは今日明日中に命が尽きてもおかしくはない」

そうと聞いて、のんびりしていられるはずがない。

四人はそれぞれ、同士討ちになりかけた際に受けた傷の完治を確認すると、直ちに璃岩城

に向かうことで合意したのだ。
扉は巨大で、本当に開けるのか疑問に思うほどだったが、取っ手の部分に触れると、ひとりでに音もなく開いた。
その先にあるのは先ほどの映像にあった広間――ではなかった。
磨き上げられた黒曜石を敷き詰めた、これまた長い廊下が先へと続いていた。
この先に、あの広間があるのだ――そう思い、足を踏み出そうとしたアーゼンターラたちは、しかしかけられた声にぎくりとした。
「ようこそおいでくださいました」
ぴたりと重なった、複数の声が彼らを出迎えたのだ。
見れば、廊下の端にずらりと並んで頭を下げている人影があった。
影そのもののように存在感が薄く、それゆえにすぐに気づけなかったのだ。
「これは……」
声を失うアーゼンターラに代わるように、マイダードがひゅう、と口笛を吹いた。
「大層なお出迎えだねえ……もしかして、全員倒さないとご本尊とは対面できないとかいうことかな？」
「自分が必ず相手をするって言ってたのにねえ」

やっぱり魔性は信用ならないわ。

忌々しげにぼやいたスラヴィエーラは、すでに腰に手が伸びている。

しかし、回廊の端に並んだ者たちは、さらに声を重ねて続けた。

「どうぞ、お進みください。我らが主が広間にてお待ちです」

数にして、百人を下回ることはあるまい——それだけの者たちに促されたと言って、素直に言葉に従うのは難しい。

今は敵意はかけらも感じない。

だが、それは今の話なのだ。もし、通り過ぎた瞬間、彼らが自分たちへの害意を露にしたとしたら？　背後から襲いかかられたら、さすがに数が数だ、無事にはすまない。

臆するわけではない。だが、人間として敵中で背中を見せるのは、あまりにも危険な行為だという思いがある。

その時だ。

前方に並んでいたひとりが列を離れ、四人に向かって歩み寄ってきた。

美しい青年だったが、纏う気配が妙だ。妖気を確かに放っているのに、それでいて魔性とは思えないのだ。

さらに言うなら、その妖気の源も奇妙だった。

こめかみのあたりに、一房だけ紫紺の髪があり、無視しがたい妖気はそこからのみ放たれているのだ。

これは……この青年はいったい何者なのだろう？

魔性でも人間でもない気配を放つこの青年は――。

そんなアーゼンターラたちの戸惑いを読み取ったのだろう、青年はにこやかにその答えを口にした。

「主が手がけた人形を見るのは初めてですか？　確か、浮城には主の最高傑作がいたと記憶しておりますが」

最高傑作――そこの部分だけ、声が微妙に乱れたのは、その存在に対する嫉妬だろうか。

だが、それ以前に青年の告げた内容に四人は驚かされた。

「人形？　人形だって？」

信じられない、とスラヴィエーラは頭を振った。

「これが？　どう見ても生身としか思えないぜ！」

マイダードも信じがたいという顔だ。

「それはつまり……ここにいるのは全員元は人間だったということか」

オルグァンの声は苦いものを呑み込んだようなものだった。

そんな反応を示す三人とは別に、アーゼンターラは必死に記憶を辿っていた。

この青年の纏う空気には、覚えがあるような気がする。そう遠くはない過去、確かにこれと酷似した空気を纏う存在に、彼女はまみえたことがあるのだ。

あれは……そう、確か。

リメラトーンの夢を見た翌朝のことだ。

いてもたってもいられず、紫紺の妖主の息子である邪羅と親しいとされる——浮城においては公然の秘密だ——リーヴシェランを訪ねた。

自分は呼び出し係ではないと、機嫌を損ねた彼女を説得してくれた女性は、彼女の護り手で……そう、確かに目の前の青年と似通った気配を漂わせていた。

「まさか、彩糸……？」

思わず洩らした一言が、仲間たちに与えた衝撃は大きかった。

「ちょ、待って！　彩糸って、例のカラヴィスの公女の護り手かい？」

「妖主が手がけたら、元がただの人間でも、浮城の護り手が務まるような人形が出来上がるってことか？」

オルグァンだけは沈黙を守ったが、その眉間に深刻そうな皺が刻まれたのをアーゼンターラは見た。

まずいことになった――どの顔にもそんな思いが浮かんでいる。
人形と聞いて、まず思うのは持ち主の意志次第で壊されようが捨てられようが、何もできない無力な存在というものだ。
だが、彼らの知る彩糸は違う。
彼女は常に目立たぬよう振る舞っているが――それは、相棒に選んだ少女の性格と才能ゆえにあまり意味を発揮していないが――その実力は護り手の中では有名らしい……アーゼンターラは知らなかったのだが。
そんな彼らの困惑を、どう受け取ったのか、一房だけ紫紺の髪を持つ青年は穏やかに否定の言葉を告げた。
「彼女は特別です。もともとが、魔性に親しまれる資質があった素材に、主が術の限りをつぎ込んだのです。主は出来の良い人形に、主と同じ色の髪を一房与えますが、彼女にはわざわざ自らの瞳を複製してまで与えました。彼女が人形ながら、一部を除く妖貴と対等な力を揮えるのはそのためです。我らにそこまでの力はございません」
ですから、警戒はご無用に――。
そうは言われても、無理なものは無理だ。
いくら彩糸が特別だと言われても、では彼女に準じる扱いを受ける――紫紺の髪の一房を与

えられた人形たちの力はどうなのかと考えずにはいられない。
もし、そんな存在に背後から襲われたなら？　それは妖鬼の大群に襲われるようなものではないのか？
四人の思いは、強ばったままの顔に現れていたのだろう――青年は深く息を洩らすと、「わたしの失敗ですね。彼女のことを話すべきではなかった」と呟いた。
そして、その優雅な腕を一振りした。
それと同時に、廊下に並んでいた人影――青年の言葉を信じるなら紫紺の妖主が手がけた人形たち――の姿は残らず消えた。
残っているのは、青年ひとりだ。
「主が自ら招かれた方々ゆえ、心づくしの歓待を、と思ったのですが……どうやら先走りが過ぎたようですね。心からお詫び申し上げます」
そう言って、青年は床に膝をつくと、仰々しいまでの礼を取った。
その途端、青年の姿もまた消え失せた。
衝撃的なことだった。
四人全員が、呆然とした。
何なのだ、ここは。

何が可能で何が不可能か、これまで培ってきた経験による知識が、ここでは一切役に立たない――ここは、本当に何という空間なのか！

呆然と立ち尽くす四人に、廊下の奥から声が届いたのはその少し後のことだった。

「すまないね。配下たちは遠ざけていたのだが、正直彼らのことは失念していたよ」

嘘のかけらも感じさせないその声――響き。

一度耳にしたこの声を忘れるはずがない。

かつて丹精込めて――その行為は人間として認められるものではないが――作り上げた人形たちのことを、すっかり忘れていたのだと告げる残酷なまでの傲慢なそれ。

人間に、こんな声は出せない。

たとえどれほどの大国の支配者であろうと、自らの過去を完全に振り切ることなど、人間である以上できはしないのだ。

忘れたつもりでも、心のどこかに必ず凝りか傷として残っているものだ。

だが、この声の主には、そんなものはない。

ないのだと、四人が確信できるほど、それは人間とは異質過ぎる価値観に生きる者の声だった。

「まあ、悪く思わないでくれ。彼らは彼らなりに、君たちを歓迎していたのだから……その廊

下はもう問題ない。進んでくれて構わないよ。その先の扉を開けば――」

わたしがいる。

「待っているよ」

優しいとさえ感じられる声がそれだけ告げて、消えた。

アーゼンターラたち四人は、それでもしばらくというもの、その場を動くことができなかった。

あれ、と戦うのか？

恐ろしい自問だが、その答えは決まっていた。

決まってはいた、けれど――。

その先に出てきた問いが、彼女たち全員の足を鈍らせたのだ。

あれ、に勝てるのか――？

否定以外の言葉を現実にするために、一体どうすればいいのかもわからぬ四人は、長いとはいえ歩き出せばすぐに扉に辿り着けるその廊下を歩ききるのに、長い長い時間を要した。

※

さあ、おいで。
来るがいい。
世界を支える五要の第四の位置にある紫紺の妖主――藍絲は、未だ開かぬ扉の向こうにいる四人に呼びかけた。
どれほど躊躇い、畏れを抱こうとも、お前たちには選択肢はひとつしかない。
ここにカーヴィアの民のできかけの人形が存在する限り――そして、雛の君が鍵に選んだ少女……初代紅蓮姫の使い手の転生体よ、お前が最も求める家族がここにある限り。
お前たちは、ここに来て、このわたしと戦うしか他に途はないのだ。
雛の君と自分たちが呼ぶ少女の望みはとうに知っている。
我が身が新たな紅蓮姫の使い手の前に敗れることをこそ、彼女が望んでいることなど。
その果てに、彼女は待望の鍵を手に入れる。
そのために、自分はすでに彼女の動かぬ計画に組み込まれた身だ。
そこから逃れるのは難しいだろうこともわかっている。
それでも――藍絲に絶望はない。
雛の君が知らない事実を、彼は……否、彼だけではない、現存する本来の五要全員が知っているからだ。

惜しむらくは、その事実が辿る道筋に、最大の障壁が控えていることが難点といえば難点なのだが……。

どう転ぶかは、これからの動き次第であることを、藍絲はこの時、誰より理解していた。

雛の君よ。

と、彼は呼びかける。

世界を支える五要の一――翡翠の妖主の喪失と同時に生まれた第六の妖主にして、五要であった者たち全てを支配する権利を持つ者よ。

あなたは、知らない。

あなたをこの世に送り出した、この世界の創造主の思いがひとつではないことを――。

また、あなたは知らない。

道具として、配下として、従えるのは自然の理だと、あなたが考えた我らにも情やこだわりがあるということを。

知らないあなたと、無意識下で知っているあれ。

最後に勝ち残るのはどちらだろう？

そんなことを思いながら、藍絲は喉をくつくつと鳴らした。

こんな風に、これまで考えたこともないことを思い出し、考える機会となるのなら、命の終

焉(えん)の予感というのも悪くないものだ、と。
この時彼は思ったのだ。
容易(たやす)く命を手放す気など、もちろん皆目(かいもく)ない彼ではあったのだけれど――。

2

「馬鹿だな」

静寂が支配する漆黒の廊下に、皮肉げな少年の声が響き渡った時、アーゼンターラは大きく胸が跳ねるのを感じた。

声のしたほうを振り返るまでもなく、それが誰のものかわかったのだ。

最後に会ったのは十日ほど前だが、あれは夢の中でのことだった。実際に顔を合わせるのは一年ぶりになる――。

「トーン！」

振り返り、いまではひとりきりとなった家族を目にしたアーゼンターラは声にならぬ悲鳴を上げた。

廊下の壁にもたれかかるように立っている少年は、一年前の面影もなく痩せ衰えていた。自ら立つのも難しいに違いない。壁に体重を預けていても、膝ががくがくと震えている。

そして、耐えられないというように、ずるずるとその場に座り込んだその姿を目にした途端、アーゼンターラは駆け出していた。

「トーン！」

近づくほどに、その衰弱ぶりに驚きが増す。

もともと大柄とは言い難く、女の子に間違われることも度々だった弟だが、一年前はもっと健康そうな体格をしていた。

それが――。

肩も胸も、記憶よりずっと薄くなった。

腕も足も、まるで枯れ枝のように細く、肌は土気色に変じている。

こんな体で、どうやってこの場に現れることができたのか――首を傾げる有様だった。

そして、その足下には影がない。

「……ひどい……」

どうして、こんなことに――。

思わず洩らした一言に、少年が皮肉に口元を歪めた。

「どうしてもこうしてもないだろ……夢で教えたはずなのに、もう忘れたの？」

もちろん忘れてなどいない。

だが、影を奪われ人形を作られることが、これほどの負担を対象者に強いるものだとは思いもしなかったのだ！

こんな酷い、こんな恐ろしいことを経て、あの人形たちは作られたのだ――人形に変えられる恐怖と苦痛はいかばかりだったろう！

「ターラ、言ったろう、来るなって。来たって無駄だって」

この言葉に、アーゼンターラは反射的に頭を振った。

リメラトーンがどう言おうと、来ずにはおれなかったのだ。

「無駄じゃないわ」

ふつふつと、胸に湧き上がるのは、怒りだった。

リメラトーンに……そしてカーヴィアの住民に、こんな思いを味わわせる紫紺の妖主への怒りが膨れあがっていく。

しかしリメラトーンは皮肉を続けた――三年もの間、アーゼンターラへの憎悪を糧に生き抜いてきた弟は、元の素直な口調を忘れてしまったようだ。

「妖主の声を聞いただけで、足がすくんだくせに」

どこから見ていたのだろう――事実だけに言い返せない。

「……呑まれてたのは認めるわ」

でも、もう大丈夫。

怒りは何よりの起爆剤とは、誰が言ったことだろう。だが確かに怯む心は消し飛んだ。

「大丈夫じゃない。そんなはずないじゃないか……」

せっかく湧いてきた闘志を挫くような言葉に、アーゼンターラは少し傷ついた。

トーン……この場面で、それはちょっと酷だわ。

声には出さず文句を言うが、それは弟には伝わらなかったらしい。

がりがりに痩せ細った指が、がしりとアーゼンターラの肩を摑んだ。必死な顔をしたリメラトーンが、彼女の目を覗きこむようにして、告げた言葉は――。

「帰れ」

だった。

「いやよ」

即答する彼女に、少年は「いいから聞けよ！」と怒鳴りつけてきた。

「命をかける覚悟でも、勝てるような相手じゃない！　むざむざ命を捨てるような真似、するんじゃないよ。ぼくやカーヴィアの住民なんて関係ない。見捨てて逃げたって、誰もターラたちを責めたりしない。いや、責められたっていいじゃないか。そんなこと、妖主がどんなに恐ろしい相手か、知らないような連中しか言いやしない……っっ！」

そこまで一気に言いきると、リメラトーンは苦しげに息をついた。
肩に触れた指先の冷たさに、アーゼンターラは泣きそうになった。
苦しいだろうに——恐ろしいだろうに。
なのに自分を見捨てろと、卑怯者になってもいいから生き延びる道を選べと、弟は言っているのだ。
「もう喋らないで。どこか休めるところはあるの？」
今にも倒れそうな顔色のリメラトーンを、このままここに置いておくわけにはいかない。
「ターラ！」
リメラトーンが悲鳴にも似た声で彼女を呼んだ——それは姉の決意を感じ取ったからかもしれない。
だが、この件に関しては、アーゼンターラは譲る気はなかった。挫かれかけていた闘志は、リメラトーンのおかげで戻ってきた。
「行ってくるから、きちんと休める場所で待っていて欲しいのよ」
「ならば、決着がつくまでその少年はわたしが預かろう」
新たな声が降ってきたかと思うと、ふたりの傍らに闇が凝った。
現れたのは、以前リメラトーンが一緒にいた妖貴の青年だった。名前は確か……。

「……芝牙尖？」

不思議そうに、リメラトーンが呼ぶと、表情に乏しい青年は、返事も聞かずに彼の体を抱き上げた。

「トーンを放して！」

「このまま石の上に座り込んでいるよりはましだと思うが？」

四年前、リメラトーンを攫った相手だ。

信じるなど到底できずに叫んだアーゼンターラだが、淡々とした口調で告げられた言葉に黙るしかなかった。

「何をしに来たの？」

素直に抱き上げられた格好で、今度はリメラトーンが問いかけた。

妖貴は温もりを感じさせない顔のまま、抑揚に欠ける声を返した。

「そなたに影糸術がかけられたと聞いて……ならば、そろそろかと思った。知る者もない場所でひとりで最期を迎えるよりは、悪縁でも知り合いがそばにいたほうが少しはましではないかと思ったものでな」

一切の手出しをしないという条件で、紫紺の君に入城の許しをいただいた――。

告げられた内容に、リメラトーンが複雑そうな笑みを浮かべた。

「あんたにそんな気遣いができるなんて知らなかったな」

皮肉な口調は芝牙尖に対しても同じだ——だが、その紫の瞳に小さな安堵が宿ったのを見て、アーゼンターラは取り返すことを諦めた。

戻って来るからひとりで待っていて——とは今の弟にはとても言えない。

確かに攫われたとはいえ、三年をともにした相手なら、ひとりきりよりはましだろう。

迎えに来るまで、とか言わないあたりが、物凄く腹立たしいけどっ！

内心の怒りはこの先に持ち越すことにする。

戻ってきたら、覚えてなさいと、心の中で呟いて、アーゼンターラは弟に声をかけた。

「すごく不本意だけど、妥協することにするわ。絶対迎えに来るから、それまで勝手に人形なんかに変わるんじゃないわよ。向こうで人形のあんたが動き出したりしたら、真っ先にぶん殴ってやるからね！」

指を突きつけての要求と宣言に、リメラトーンは一瞬目を瞠ったあと、小さく噴き出した。

「なによ？」

「いや、久しぶりにターラのわがままを聞いたと思って。萎れてるターラを苛めるのもそれなりに楽しかったけど、やっぱりターラはそのほうがいいや」

あまりといえばあまりの言いざまに、彼女は弟を睨みつけた。

「あんたは昔のあんたの爪の垢でも煎じて呑んだほうがいいわね。すっかり口が悪くなっちゃって」
「素直に性格がって言っていいのに」
茶化すようなリメラトーンの言葉に、「自覚があるなら直しなさい！」と返した。
ふたり、顔を見合わせ笑い合う。
少しだけ、あの頃に戻れたような気がした。
「じゃあ、行って来るわ」
リメラトーンは「行ってらっしゃい」とは言わなかった。
「うん」
と小さく頷いた彼の唇は紫色で、それすらも本当は辛かったのに違いない。
さあ、行こう。
くるりと彼らに背中を見せて、アーゼンターラは仲間たちの待つ場所へと歩き出した。

※

ぱん、と響いた音に驚いてそちらを見ると、スラヴィエーラが自分で自分の頬を両手で叩い

ていた。

「スラヴィ？」

何をしているの？

そう尋ねたアーゼンターラに、スラヴィエーラは悪戯っ子のような笑顔で答えた。

「ちょっと、自分に活を、ね」

そうして勢いよく両手をぐるぐると回し始める。

「ほんと……相手が妖主だってだけで怯んでた自分が情けないわ。あんたたちの遣り取りが切れ切れだけど聞こえてきて、ほんとに自分が恥ずかしかったわ」

「まったくだよなー」

こちらは手首を回しながら、マイダード。

「あんな姿であんなこと言われちゃな。ほんとに尻尾を巻いて逃げたら、おれたち最低の卑怯者じゃん。そんな、自分で自分が許せないような真似、おれは御免だ」

たとえ、ほんとはそれを弟くんが狙ってたとしても、な。

小さく付け加えられた言葉に、アーゼンターラが口を開くより先に、オルグァンの拳がマイダードの頭に振り下ろされた。

「いてえな、旦那！」

「お前のひねくれた物の見方を矯正するには、これでも足らないぐらいだ」
オルグァンが怒るのは珍しい――色の薄い瞳が、ほとんど灰色に変わっていた。
「ターラ、本気にするなよ。あの体では寝台から起き上がることなどまず不可能だ。そんな体を押してあそこまで来たんだ。そんな弟の気持ちを疑うのは酷どころの話じゃないぞ」
オルグァンの気遣うような目と言葉が嬉しかった。
アーゼンターラはこくりと頷いて答えた。
「疑ってないわ」
「なら、いい」
「全く、この男と来たら、何でも勘繰るんだから……」
「用心深いと言ってくれ。おかげでおれは生き延びてきたようなもんなんだよ！」
結んだ髪をスラヴィエーラに乱暴に引っ張られた青年が、慌てて弁解したが、林檎を片手で砕く女性はそのぐらいでは許すつもりはないらしい。
「だからあんたは親友がいないんでしょ！　勘繰るのは魔性相手に限定しなさいって、わたしは何度も忠告しただろうが！　それを、まったく……」
呆れたようにため息をつくと、スラヴィエーラもアーゼンターラに声をかけてきた。
「ほんとに気にするんじゃないよ、ターラ。こいつの悪癖は、すぐに直せそうにないから、後

日長期計画でも一緒に立てよう」

「そうね。少しだけ、腹が立ったから、適度な体罰込みの計画にしたいわ。担当はオルグァンかスラヴィで……」

アーゼンターラのこの言葉に、マイダードが全面降伏した。

「やめて、ターラちゃん。謝るから。何度だって謝るから！　林檎握り潰すスラヴィや氷結漸の柄砕いちゃう旦那の鉄拳制裁なんて、考えただけで心臓が止まりそう……」

恐ろしげにそう言った刺青の青年は、一瞬で表情を改めると、真面目な顔で頭を下げた。

「すまなかった。完全におれの失言だった」

本気で謝ってくれているのがわかる声と口調だった。

先ほどの言葉は、確かに心を引っ掻いたけれど、それはマイダードがアーゼンターラを心配してくれるからこそのものだということもわかるので、彼女は笑って応じることができた。

「マイダードがそう思うのも無理はないと思うから、もういい。マイダードはあたしが騙されてたらと心配してくれたのよね。あたしは単純で騙されやすいから、マイダードみたいに慎重なひとがそばにいてくれるのは、きっと良いことなんだわ」

それはアーゼンターラの本心だった。

経験不足の上にすぐに突っ走ろうとする自分のような人間のそばに、慎重な考え方をする人

間がついていてくれなかったら、今の自分はきっとない。
スラヴィエーラもオルグァンも、そうだ。
自分はずっと、彼らに守られてきたのだ。
だから——今すぐは無理だけれど。
いつか、自分も彼らを守れるような人間になりたい。
アーゼンターラは心からそう思ったのだ——。

3

アーゼンターラたちが広間に着いた時、扉は開け放たれていた。

「よく来た」

広間の最奥——玉座にある紫紺の髪と瞳を持つ青年から放たれた声は、扉のところで立ち止まってしまった一行全員の耳に届いた。

頭がじんと痺れて、何も考えられなくなるような美声だ。

だが、アーゼンターラたちは広間の壁面を飾る人形の姿に、声以上に心を奪われていた。

いったい、何体あるのだろう。

百や二百ではない。いや、千や二千でも——否、一万をも軽く超えるその人形たちは、一体一体がそれぞれ違う姿を保っている。

老若男女を問わず、精緻に作り上げられたそれらは今にも瞼を開きそうなものだ。

肌の色も髪の色も違う。

似た顔立ちのものもあれば、全く似通ったところのない人形が並んでいることもある。
平凡な容姿のものも、人目を惹く美貌のものも、目を覆わんばかりの姿のものさえ、区別することなく無造作に並べられている。
何という細工の妙――もしも人間の人形師がこれを目にすれば、嫉妬に身を焦がすか、己の限界を見せつけられて絶望するかのどちらかだろう。
人形に興味を持たぬ四人ですら、息を呑んで見つめずにおれぬのだ――その出色の出来映えに作り手が天才であることを疑うことすらできない。
映像だけではわからなかった、人形たちが独自に放つ気配が彼女たちを圧倒していた。
名工の手による人形には魂が宿るとは聞いたことがあるが、ここまで生きているとしか感じられない人形を目にしたのは四人とも初めてのことだった。
そして、その異様な事実の奥に隠された意味に気づいたのも、四人同時のことだった。
一万を軽く超える……そう、目見当ではそれぐらいしかわからないが、夥しい数の人形。まるで命が宿っているとしか思えない人形。老若男女を問わず、老人から赤子まで揃えられた人形。
そう……まるでそこに並ぶ人形だけで、巨大な街ひとつも作れてしまいそうな――。
「カーヴィアの……」
その声を洩らしたのが、仲間の誰なのか、あるいは自分なのかさえ、彼らはわからなかった。

突きつけられた事実は、あまりに大きかったのだ。
四人の顔から血の気が引いた。
生きているように感じるのも道理――。
これは、カーヴィアの住人たちを模し、いまその命を啜り尽くそうとしている、紫紺の妖主の手による人形群なのだ！
桁外れという言葉さえ、当てはまらない。
呆然とする四人に、玉座の主は微笑みながら告げた。
「待っていたよ、浮城の人間たち。まずはわたしからの歓迎の祝砲だ。喜んでもらえることを願っているよ」
力の発動を、誰ひとり感じ取ることはできなかった。
だが、その言葉と同時に、確かに妖主は力を揮ったのだ！

※

広間中に、一瞬にして紫紺の糸が張り巡らされた――そこにある、生身の人間の肉体など無視して！

「きゃあぁぁっ！」
「いっっ！」
「うおう！」
三つの悲鳴が広間に響いた。
スラヴィエーラ、マイダード、オルグァンのそれだ。
張り巡らされた糸に貫かれ、縫い止められた三人を襲った苦痛の証だ。
アーゼンターラの悲鳴がそこに加わらずにすんだのは、すべての糸を蜜里が自らの体で代わりに受けたから——に過ぎない。
「スラヴィ！　マイダードもオルグァンも……ああぁ、蜜里！」
悲鳴を上げたアーゼンターラを、紫紺の妖主は珍しいものを見つけたとでも言いたげな目で見た。
「なるほど。幼くとも妖貴に我が身に代えても守らせようとするだけの資質があるわけか。それが何か、見極めさせてもらおう」
その瞬間、紫紺の妖主の標的に、自分が選ばれてしまったことをアーゼンターラは悟った。
動かなければ——そう思った時、腰の破妖刀が震えているのに気づいた。
柄に触れ、それが恐怖による震えでないことを知る——笑うような、嬉しそうな、そんな震

え方をする時、この破妖刀が何を思っているかは過去の経験から明らかだった。
きっと、『極上！』とでも叫んでいるに違いないのだ。
まったく、使い手の気も知らないで、この破妖刀ときたら！
どんな場合においても食欲優先の破妖刀の態度に、こんな状況だというのにアーゼンターラは笑いたくなった。
そうだ。恐怖に縛られ竦んでいる場合ではないのだ。
スラヴィエーラもマイダードもオルグァンも蜜里も――誰も動けない状況で、自分まで動かなくてどうするのだ。
紫紺の妖主の関心が自分に向いたのなら、かえって好都合というものではないか。
自分が彼の気を引きつけている間は、彼らの身は安全なのだ。
ならば、彼らの傷が癒えるまで、引きつけ、可能な限りその力を殺いでみせる！
決意を固め、アーゼンターラは破妖刀の柄を握りしめた。
「紅蓮姫」
呼びかけながら、真紅の破妖刀を抜き放つ。
刹那、紫紺の妖主の顔が不快げに歪んだ。
「……相変わらず、ひとを食餌扱いするか」

真紅に輝く刀身に、不愉快な過去を見たのだろう――心底忌々しげに呟く声を耳にした時、アーゼンターラは知っていたはずなのに、忘れていた事実を思い出した。

そうだ。

いかに強大な力を揮う妖主であっても、完全無欠ではないのだ。

過去に、使い手は違えども、彼は紅蓮姫に命の一部を奪われたことがあるのだ。決して無敵というわけではない。

「紅蓮姫、行くわよ！」

叫んで、アーゼンターラは走り出した！

蜜里の援護が期待できない今、紅蓮姫には視えているという心臓の位置を知ることはできない。だが、そこは食欲魔神の破妖刀のことだ。

勝手に狙ってくれるのは目に見えている。

いつもは厄介にしか思えないその悪癖が、今は逆にありがたい――紅蓮姫が狙うその先に、確実に妖主の心臓があると知ることができるのだから！

あえて紅蓮姫の好きなように動かせると、彼女の狙いが妖主の鳩尾あたりだということがわかった。正確な位置まではわからなかったが、大体狙う場所は決まった。

だが、それを容易く許してくれる相手ではない。

「そうそう馳走してはやらんよ」
妖主の言葉と同時に、空間一杯に紫紺の糸が走り出した！
力の糸だ――貫きも斬りもする。
「紅蓮姫！　あたしが動けなくなったら、ご馳走にはありつけないわよ！」
だから、今は言うことをききなさい。
告げながら、襲いかかってくる糸を払う。だが、全ての糸を断ち切ることはできない。
ざくり、と左上腕に傷が走った。
次いで両脚の太ももに、腰に、右肩に熱を思わせる痛みが襲う。
だが、アーゼンターラは構わなかった。
これぐらいでは、止まらない。
止まれるものか。
紫紺の男性の口から、感心するような声が洩れた。
「痛みには怯まぬ、か。では、物理的に動きを止めさせてもらおう」
その言葉が終えるか終えないか――。
アーゼンターラは自らの身に生じた異変に気づいた。
「あ？」

足が、前に進まない。
否、足が、腕が、自分の言うことをきかない！
それだけではない。筋肉が、不自然な方向に捻られていく！
「なに⁉」
上げた声は、悲鳴に取って代わられた。
めきめきと不吉な音を立てながら、脚が雑巾か何かのように捻れ、そうして骨が砕かれたのだ！
「きゃあぁぁっっ！」
その場に倒れても、足の捻れは止まらない。
「ターラ！」
蜜里の叫びが聞こえたが、答えることはできなかった。
絶対的痛みに支配され、生理的な涙が溢れ出す。
「あああぁぁぁっっ！」
脚が……あたしの脚が！
このままでは捻り切られてしまう！
せっかく紅蓮姫が心臓の位置を教えてくれたのに、これでは立ち上がれない。

いえ、とアーゼンターラは痛みのなかで思った。
立てなくても、前には進める……そう、這ってでも！
紅蓮姫の柄を握ったまま、彼女は腕に力をこめた。
要は紫紺の妖主に紅蓮姫が届くまで近づけばいいのだ――心臓は鳩尾。立ち上がれなくても、届かない位置ではない！
無様でもなんでも……傍からどう見えようが構わない。
蜜里が身をもって庇ってくれたのだ。たくさんの命がかかっているこの場面で、諦めることだけは決してしない！
その時、頭上から妖主の声が聞こえた。
「脚を折られても諦めぬか。ならば、その右手を貰おう」
言葉と同時に、紫紺の糸がアーゼンターラの右上腕に巻きついた！
斬られる！
そう思った瞬間のことだった。
「ターラ！　だめ、そんなことだめぇぇっ！」
蜜里の悲鳴が広間に響き渡り――そして。
その声に応えるかのように、優しい黄金の光が空間を満たした――。

※

光が消えた時、蜜里は寸前まで自分を支配していた痛みが綺麗に消えていることを知った。
それだけではない。
倒れていたスラヴィエーラたちが、不思議そうな顔をして立ち上がろうとしている。
あの光が、紫紺の妖主から受けた傷を癒してくれたのだとしか思えない。
だとしたら――。
「ターラ⁉　ターラ、大丈夫⁉」
一番大切な存在の姿を求めた彼女は、銀髪の少女が信じられないと言いたげに自分の脚に触れているのを見て安堵した。
捻られ折られた脚が完治している。
腕に巻きついていた紫紺の糸も消えている。
全てはあの魔具の力に違いない。
何という力だろう――蜜里はアーヴィヌスから与えられた魔具の力の強大さに驚きを感じていた。

与えられた当初は、自分の力を増幅する程度の役にしか立たなかったはずなのに、いつの間にかその力が増している。

それとも、最初自分が充分に魔具の力を引き出せなかっただけなのだろうか？　もともと、魔具にはこれほどの力が宿っており、自分の未熟さがその発現を妨げていたのだろうか。

だとしたら、自分は力を磨かなければならない。

妖主の力を打ち消すほどのこの力を自在に扱えるようになれば、この先アーゼンターラの負担を大幅に軽減することができるのだから。

そんなことを考えていた蜜里は、紫紺の妖主の動きに気づくのが遅れた。

「おかしな物を懐に隠し持っているな」

いつの間にか、紫紺の魔王が正面にいた。

全身から放たれる力に触れるだけで、陶然たる気分が胸に湧き上がってくる。

魔性は無条件に力と美に反応するもの――たとえ敵対状態にあっても、妖主の圧倒的力と美は蜜里を酔わせようとする。

いけない。これは敵、引きずられてはだめ！

必死に自分に言い聞かせながら、彼女は魔具――真球の黄玉を収めた胸元を押さえた。

すい、と妖主が手を伸ばして告げた。

「渡しなさい、幼い同胞。それは王蜜の妖主が手がけた品、人間の世にあっていいものではないよ」

思いがけない言葉に、蜜里は大きく目を瞠った。

強大な魔性が作ったことはわかっていた。だが、まさか妖主自らの手によるものとは、想像さえしなかったのだ。

差し出された手を前に、蜜里はぶるぶると頭を振った。

渡せと言われたからといって、素直に渡せるわけがない。

この魔具がなければ、アーゼンターラの腕は切り落とされるところだった。脚は砕かれたまま、立ち上がることもできなかったのだ。

それほど力に溢れた物を、ただでさえ強大な敵に渡すなど冗談ではなかった。

後ずさろうとして、蜜里は気づいた——動けない。何か見えない力が、彼女の動きを封じている！

誰の力かなど、考えるまでもない。

「さあ」

紫紺の双眸が、真っ直ぐに蜜里の瞳を見つめていた。

魂ごと命ごと、搦め捕られてしまいそうだが、蜜里は必死に抗った。

「渡すんじゃないよ、蜜里！　それを取られたら、わたしたちの勝機は完全になくなっちまう！」

スラヴィエーラが叫びながら、夢晶結を手に妖主に斬りかかる！

「悪いが堪えてくれ」

詫びの言葉を告げながら、オルグァンが氷結漸を振りかざす。

「スラヴィ！　多分心臓は鳩尾だ！　さっきから紅蓮姫が狙ってたから間違いないはずだ！」

マイダードが指示する内容に、スラヴィエーラが小さく頷くのが見えた。

だが――。

彼らの攻撃が紫紺の魔王に届くことはなかった。

「うるさい」

妖主の短い一言で、ふたりの体は宙に舞った。

「スラヴィ！　オルグァン！」

アーゼンターラの叫びが聞こえたが、妖主の陰になっていて、蜜里からは見えない。

「少し黙っていなさい、お前たち。わたしは今、この幼い娘と話しているのだ」

場違いな台詞を堂々と言い切り、妖主がさらに力を揮った。

ずん、と空間そのものが重みを増した。

蜜里さえ、膝をつきそうになったその力は純粋な妖気だった。支配の意志が込められた妖気が、跪け、頭を下げろと強制しているのだ！

見ずともわかる――この場で床に縫い止められていないのは、自分と目の前の至高の存在しかいない。

蜜里は唇を噛みしめた。

どうしよう――どうすればいい!?

妖主に魔具を渡すわけにはいかない。スラヴィエーラの言ったとおり、これがなければとっくに自分たちは終わっていた。

だが、このままでは――！

「さあ、良い子だ。その懐の物を渡しなさい。最古の者に連なる力など、漆黒を纏う身には過ぎたものだ。早晩お前を滅ぼすだろう」

だから、自分に渡すのだ――。

妖主の声は不思議と優しかった。

まるで本当に蜜里を案じてそう言っているように聞こえる。

だが、だからと言って従うことはできない。それだけは断じてできない。

本当にどうすれば――!?

その時、蜜里の脳裏に閃いたことは、これまで考えたことさえないものだった。だが、それ以外に方法はない——奪われた後で思いついても遅いのだ。

蜜里は右手に力をこめた。

動く——自ら魔具を差し出させるために、妖主は自由を奪わなかったのだ。

「あ……」

声も出る。

恭順の言葉を引き出すために、こちらの自由も奪わなかったのだろう。

蜜里は覚悟を決めた。

何が起こるかわからない危険な賭けだが、敵に奪われるよりはずっとましなはずだ。

「どうした。それとも、無理矢理奪われるほうがいいのか？」

紫紺の双眸に、苛立たしげな色が見えた。

もう引き延ばせない——そう思った時だ。

アーゼンターラの声が聞こえた。

「渡してしまいなさい、蜜里！」

漆黒の石床に縫い止められ、恐らく息をするのも大変な力を受けているはずの少女の叫びは、何よりも強く蜜里に響いた。

「いくら貴重でも強くてもっ！　蜜里には代えられない！　渡してしまうのよ！」

ターラ――ターラ。

この魔具の力で助けられたことを忘れたはずもないでしょうに。スラヴィエーラたちが言ったとおり、これなしに勝利は望めないとあなたもわかっているはずなのに。

なのに渡せと、あなたは言うのね。

くすり、と笑みがこぼれた。充分だと思った。

アーゼンターラのその言葉だけで、この先何があっても後悔はしない。

蜜里はゆっくりと懐から真球の黄玉を取り出すと、口の中に放り込んだ。

そして、渾身の力で彼女は魔具を噛み砕いたのだ！

瞬間――圧倒的な力の渦が口内を満たしたが、それは蜜里を破壊することも支配することもなかった。行き先があるかのように、するりとそれは彼女の中から消えてしまった。

ああ、これはこの場にいる全員の怒りを買ったわね。

特に妖主のそれは一際大きく激しいに違いない。

そう思い、見上げた先で――蜜里は信じられないものを見た。

紫紺の妖主は、笑っていたのだ。

冷笑ではない。

それなら蜜里は恐怖に縛られたはずだ。そうではない。妖主は何事かを成し遂げて満足したような笑みを浮かべていたのである。

だが、それは一瞬のこと——次に彼の顔に浮かんだのは驚愕と衝撃だった。

なにが起こったのか。

蜜里はすぐに、その理由を知った。

魔性の命を糧とする真紅の破妖刀——その切っ先が、彼の鳩尾から姿を現したのである！

※

浮城の一室で、魅縛師の少女が護り手の女性が淹れてくれたお茶を楽しんでいた時のこと——それ、は起こった。

「アーゼンターラたちはもうカーヴィアに着いてる頃よね。上手くやってるかしら……何とか紫紺の妖主に繋がる手立てが引き出せるといいんだけど……」

金髪の巻き毛を掻き上げながら、リーヴシェランは心配そうに呟いた。

かつて、兄を紫紺の配下の妖貴によって人形に変えられかけた彼女にとって、アーゼンターラのことは他人事ではないのだ。

何とか無事に弟を取り戻してほしいと思っている。
「そうですね……カーヴィアほど大きな街を襲うとなれば、当然主の許しが必要ですから」
虹色の髪の護り手が、優雅にお茶をつぎ足しながら答える。
「最大の難事は、紅蓮姫の食欲に引きずられて、問題の妖貴の命を奪い尽くさないようにすること、でしょうか」
茶目っ気のあるその言葉に、リーヴシェランが「まったくね」と笑った時だ。
突然、彩糸の指からティーポットが滑り落ちた。
「やだ、彩糸、どうしたの？　これ、気に入ってるって言ってたのに……」
あなたにしては珍しいじゃない――。
そう続けようとしたリーヴシェランは、彩糸の尋常ならざる様子に目を瞠った。
「彩糸？」
どうしたの――と尋ねる前に、護り手の体はその場に崩れ落ちた。
「彩糸！」
慌てて立ち上がり、彼女は彩糸の傍らに膝をついた。
「どうしたの、ねえ、彩糸ったら！」
それに答えることなく、虹色の髪と漆黒の双眸を持つ美女は「わが……き……」と呟いたの

を最後に動きを止めた。
漆黒の瞳は開いたままだ——だが、そこに彼女の意志の光はない。
不吉な予感に、リーヴシェランはいやいやとばかりに頭を振った。
「彩糸、ふざけないで……ねえ、起きてよ、起きてったら……彩糸！」
いくら呼んでも、その体を揺さぶっても、何一つ反応がないことを思い知らされるまで、いくらもかかりはしなかった。
「いやよ、彩糸！　こんなのはいやぁぁっ！」
その悲鳴が途絶えた時、リーヴシェランは意識を失っていた。
その傍らに護り手の女性の姿はなく——代わりに、光る砂の山が残されていた……。

※

その、少し前のこと——。
浮城の奥まった場所に、護り手たちによって厳重に護られている氷室がある。
そこに異変が生じていた。
何かあればすぐ報告するよう、城長に命じられているはずの護り手たちだが、誰もそうはし

なかった。先日訪れた懐かしい客人から、別のことを『お願い』されていたからだ。
最強の魅了眼の持ち主に逆らえる護り手はいない。かくして、彼らは氷室のなかで起きようとしていることを、興味深く見守ることにしたのである。
氷室の中心に置かれた櫃の中で異変は起こった。
心臓の動きを止めた、死体としか呼びようのない黒髪の娘の睫が小さく震え、その瞼がゆっくりと持ち上げられたのだ。
そうして露となったのは、右の琥珀と左の深紅。
「ここは――？」
唇から洩れた声は、女性としてはやや低いものだ。
恐ろしい護り手も破妖刀もその傍らに存在しない今、彼女の問いに答えることを拒む護り手はいなかった。
『この先この娘が目覚めたら、どうかこの娘がしたいようにさせてちょうだい』
チェリクにそう頼まれたからだけではない。
深紅の魔王の不可視の刻印を受けて彼女が浮城を訪れて以来、近づくことはなくとも、皆でその成長を見守ってきたのだ。
その彼女の目覚めを、喜ばぬ者はここにはいなかったのである――。

あとがき

この本が発売される頃には、冬将軍とインフルエンザが猛威を揮っていることと思いますが、皆様如何お過ごしでしょうか。

こんにちは、前田珠子です。

破妖の剣『鬱金の暁闇』第八巻をお届けします。

内容に関しましては何も言えませんが……ようやくここまで辿り着いた、というのが正直な思いです。

鬱金再開にあたりプロットを立て直す時、いろいろな筋道を考えました。

考えに考えてこの筋道を選んだわけですが、筆力不足で読者さまには欲求不満のストレスを与えてしまったようです。この先の展開で、「読み続けててよかった！」と思ってもらえる作品になるよう全力を尽くします。

が、次巻からは本編ラストまでまっしぐらです。（越えなければならない巨大な山がふたつほどありますが）

その前に、未完のまま一年以上放置している『聖石の使徒』番外編の『狩人の覚悟』の続き

を書かせていただきます。

ここ三年の間に、母とわたしで買い集めたクリスマスローズも増え、株も随分大きく育ちました。あとがきを書いている時点で、小さな蕾を十個ほど見つけております。発売される頃には蕾も大きくなり、数も増えているでしょう（だといいという希望的観測ですが）。今度初めて蕾をつけた株もいくつかあり、今から咲くのが楽しみです。

でも、持っていない花色とか見つけたら、また買ってしまうのでしょうが（笑）。我が家のクリスマスローズ畑は広がる一方です。

今回もイラストの小島榊さんをはじめ、まんが家の松元陽さん、関係各所の皆様に大変お世話になりました。この場を借りてお礼申し上げます。

それでは、また次の本でお会いできますように――。

平成二十三年　冬

前田　珠子

※この作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件などにはいっさい関係ありません。


はじめまして
松元と申します
漫画版『破妖の剣』を
ザ・マーガレットで
連載させて
いただいております


漫画版では
『柘榴の影』を
描かせていただいて
いるのですが
この『鬱金の暁闇』では
もうだいぶ状況が
変わってきていますね
一読者として　とても
楽しみに読ませて
いただいています


最初お話を
いただいたときは
戦う女の子が
出てきますよ
それは
すてき
ですね
もう
ふたつ返事
でした
ものすごい
美形か…
うぅぅ
松の剣が…
私の剣で…
多少(?)の
不安要素も
ありましたが…


クライマックスという
ことで
オールスターが総出演
ですが　中でも
マイダード　王　邪魔
スバル　大丈夫
リーベ
男性陣を差し置いて
飛び出していってしまいそうな
この方々がとても好きです
漫画版も少しずつ
佳境に近づいて
いっています
少しだけ若いふたりの
お話ですが　併せて
楽しんでいただけると
嬉しいです！

この作品のご感想をお寄せください。

前田珠子先生へのお手紙のあて先

〒101－8050　東京都千代田区一ツ橋2－5－10
集英社コバルト編集部　気付
前田珠子先生

まえだ・たまこ

1965年10月15日、佐賀県生まれ。天秤座のB型。『眠り姫の目覚める朝』で1987年第9回コバルト・ノベル大賞佳作入選。コバルト文庫に『破妖の剣』シリーズ、『カル・ランシィの女王』シリーズ、『聖獣』シリーズ、『聖石の使徒』シリーズ、『天を支える者』シリーズ、『空の呪縛』シリーズ、『ジェスの契約』『トラブル・コンビネーション』『陽影の舞姫』『女神さまのお気の向くまま』『万象の杖』『月下廃園』など多数の作品がある。興味を覚えたことには積極的だが、そうでない場合、横のものを縦にするのも面倒くさがる両極端な性格の持ち主。趣味と実益を兼ねてアロマテラピーに手を出したものの、今ではすっかり実益のほうが大きくなり、趣味とは言いがたくなりつつある。次こそは優雅な趣味を持ちたいと身の程知らずにも思っている。



——破妖の剣　6——
鬱金（うこん）の暁闇（ぎょうあん）8

COBALT-SERIES

2011年2月10日　第1刷発行

★定価はカバーに表示してあります

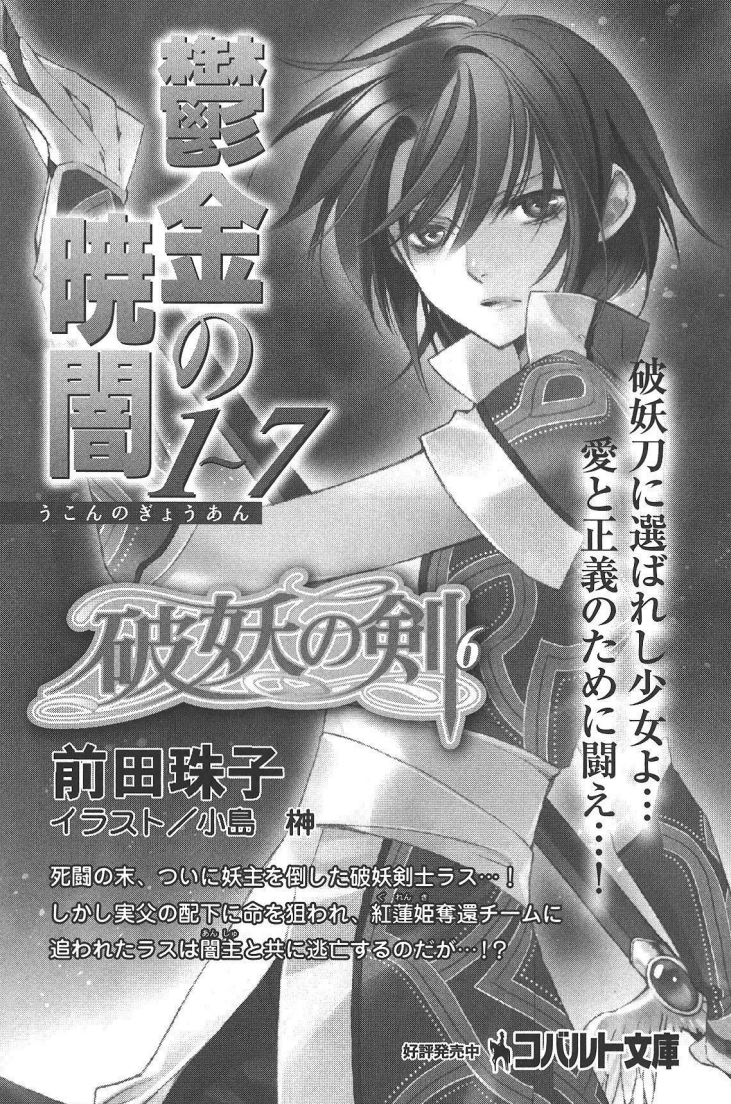
著　者　前田珠子
発行者　太田富雄
発行所　株式会社集英社

〒101－8050
東京都千代田区一ツ橋2－5－10
(3230) 6268 (編集部)
電話　東京 (3230) 6393 (販売部)
(3230) 6080 (読者係)

印刷所　大日本印刷株式会社

© TAMAKO MAEDA 2011　Printed in Japan
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替え致します。購入された書店名を明記して小社読者係宛にお送り下さい。
送料は小社負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したものについてはお取り替え出来ません。

ISBN978-4-08-601489-2 C0193

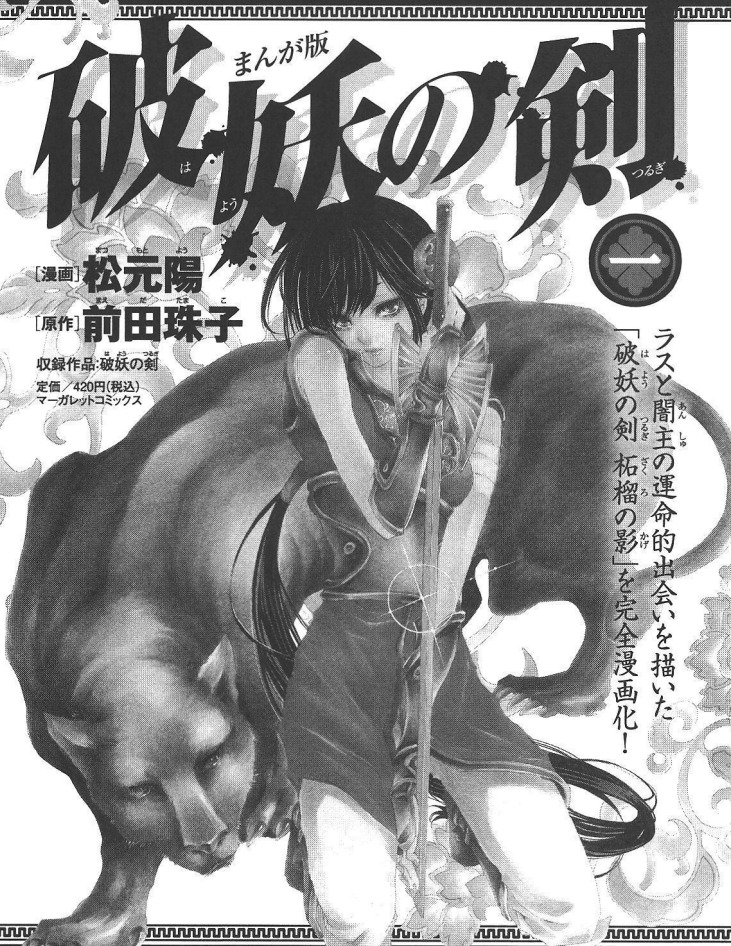

黄金の暁闇1~7
うこんのぎょうあん
破妖刀に選ばれし少女よ…
愛と正義のために闘え…!
破妖の剣6
前田珠子
イラスト／小島 榊
死闘の末、ついに妖主を倒した破妖剣士ラス…!
しかし実父の配下に命を狙われ、紅蓮姫奪還チームに
追われたラスは闇主と共に逃亡するのだが…!?
好評発売中
コバルト文庫


破妖の剣 外伝
珠玉の超(スーパー)ファンタジーに酔いしれよ!!
言ノ葉は呪縛する
義父レンバルトを密かに想う少女リエンカ。ある夜、レンバルトの秘密を知ったリエンカは…!?
紅琥珀(こうこはく)
異形を仮面で隠した人々が棲むアルバワヌの里で、逃走中のラスと闇主は…!?
前田珠子
イラスト／小島　榊
好評発売中
コバルト文庫

まんが版

破妖の剣

一



［漫画］松元陽

［原作］前田珠子

収録作品：破妖の剣

定価／420円（税込）
マーガレットコミックス

ラスと闇主の運命的出会いを描いた「破妖の剣 柘榴の影」を完全漫画化！

2月25日（金）発売！

ザ マーガレット（偶数月24日発売）で好評連載中！


前田珠子
イラスト／山本鳥尾
聖石の使徒
シリーズ
選ばれし子供たちが、世界を守る――!!
其は焔をまとう者
其は力を放つ者
其は天秤をかざす者Ⅰ・Ⅱ
其は水に遊ぶ者Ⅰ・Ⅱ
揺籃の瞳
蒼の組木箱
狩人の爪
狩人の覚悟
コバルト文庫
好評発売中



コバルト文庫
好評発売中

本好き少女の波瀾万丈ファンタジー！

前田珠子

イラスト／明咲トウル

天を支える者

天を支える者1～4
天を支える者古懸唄1～5
天を支える者罠は、蜜の味
天を支える者緑風に誘われ
天を支える者緑の糸をたどって
天を支える者緑蘿の檻に囚われ
天を支える者緑玉の枷に繋がれ
天を支える者緑の鈴を、振る
天を支える者空に響く緑の鈴音



そして花嫁は恋を知る
月の女神は黎明を導く

小田菜摘 イラスト／椎名咲月

皇妃イリアティーヌは、奴隷から皇帝となった夫シリウスの過去が気になっていた。新興宗教が勢力を増し、謎の疫病が猛威を振るう中、シリウスの過去を知る女性が現れて!?

〈そして花嫁は恋を知る〉シリーズ・好評既刊

黄金の都の癒し姫
白銀の都へ旅立つ姫
紅の沙漠をわたる姫
緑の森を拓く姫
緑の森を統べる姫
黄土の大地を潤す姫
大河は愛をつなぐ
青の大河をのぼる姫
黄金の都を興す姫
黄金の都を受け継ぐ姫

好評発売中 コバルト文庫



ミスティーレッド
ふたつの恋、ふたつの未来

青木祐子 イラスト／鐘乃悠可

予知能力で未来が見える王子レッド。故国から家庭教師のリリーベルと家出してフランスの港町に辿り着いた。しかし、その能力のせいでレッドを利用しようとする陰謀が!?

〈ミスティーレッド〉シリーズ・好評既刊

ミスティーレッド はざまの街と恋する予言者

好評発売中 コバルト文庫



姫婚オールアバウト

野梨原花南 イラスト／雪 リコ

１０歳の時にクーヴ国の王子と政略結婚したものの、革命が起きて王家が滅亡してしまいバツイチになったレッカ姫。それ以後は街中で静かに暮らしていたが、ある日、父である国王から突然の呼び出しが。なんと、西の山の魔王と政略再婚するように命じられて…？

好評発売中 コバルト文庫



平安ロマンティック・ミステリー

嘘つきは姫君のはじまり 少年たちの恋戦

松田志乃ぶ イラスト／四位広猫

宮子の秘密を究明する次郎君と、宮子の帰りを待つ真幸が「名刀」を巡る事件に巻き込まれ、はち合わせてしまう。さらに、お互いの正体とそれぞれの宮子との関係に気づいて…!?

〈平安ロマンティック・ミステリー　嘘つきは姫君のはじまり〉シリーズ・好評既刊

①ひみつの乳姉妹　②見習い姫の災難　③恋する後宮　④姫盗賊と黄金の七人（前編）　⑤姫盗賊と黄金の七人（後編）　⑥ふたりの東宮妃　⑦東宮の求婚　⑧寵愛の終焉

好評発売中 コバルト文庫



鏡の国の眠り姫

山本　瑤 イラスト／明咲トウル

命の焔を奪われたティファニーは、優しく接するシリンに距離を感じ寂しく思っていた。
ティファニーを救う術を探してシリンが留守がちにするなか、エディス王子が現れて…？

〈鏡の国〉シリーズ・好評既刊

鏡の国の女王陛下
鏡の国の王太子殿下
鏡の国の魔法使い
鏡の国の恋人たち

好評発売中 コバルト文庫

コバルト文庫　雑誌Cobalt

「ノベル大賞」「ロマン大賞」募集中!

集英社コバルト文庫、雑誌Cobalt編集部では、エンターテインメント小説の書き手を目指す方々のために、広く門を開いています。中編部門で新人発掘の性格もある「ノベル大賞」、長編部門ですぐ出版にもむすびつく「ロマン大賞」。ともに、コバルトの読者を対象とする小説作品であれば、特にジャンルは問いません。あなたも、才能をこの賞で開花させ、ベストセラー作家の仲間入りを目指してみませんか!?

大賞入選作　正賞の楯と副賞100万円（税込）

佳作入選作　正賞の楯と副賞50万円（税込）

ノベル大賞

【応募原稿枚数】400字詰め縦書き原稿95枚～105枚。
【しめきり】毎年7月10日（当日消印有効）
【応募資格】男女・年齢は問いませんが、新人に限ります。
【入選発表】締切後の隔月刊誌『Cobalt』1月号誌上（および12月刊の文庫のチラシ紙上）。大賞入選作も同誌上に掲載。
【原稿宛先】〒101－8050　東京都千代田区一ツ橋2－5－10
（株）集英社　コバルト編集部「ノベル大賞」係
※なお、ノベル大賞の最終候補作は、読者審査員の審査によって選ばれる**「ノベル大賞・読者大賞」**（読者大賞入選作は正賞の楯と副賞50万円）の対象になります。

ロマン大賞

【応募原稿枚数】400字詰め縦書き原稿250枚～350枚。
【しめきり】毎年1月10日（当日消印有効）
【応募資格】男女・年齢・プロアマを問いません。
【入選発表】締切後の隔月刊誌『Cobalt』9月号誌上（および8月刊の文庫のチラシ紙上）。大賞入選作はコバルト文庫で出版（その際には、集英社の規定に基づき、印税をお支払いいたします）。
【原稿宛先】〒101－8050　東京都千代田区一ツ橋2－5－10
（株）集英社　コバルト編集部「ロマン大賞」係

応募に関する詳しい要項は隔月刊誌Cobalt（2月、4月、6月、8月、10月、12月の1日発売）をごらんください。

9784086014892

ISBN978-4-08-601489-2

C0193 ¥505E

1920193005059

定価 本体505円＋税



コバルト文庫

破妖刀「紅蓮姫」の第二の使い手アーゼンターラと紫紺の妖主の戦いの火ぶたが今や切って落とされようとしていた……。一方、「紅蓮姫」の真の使い手ラエスリールは、永い眠りから目覚め、母チェリクの身体のなかでさらなる力を得、完全復活の時を迎えようとしている。魔性最強の妖主たちさえをも従えた「雛の君」が仕掛けようとしている新たな「遊戯」とは!?　最も激しい聖戦が今始まる…！